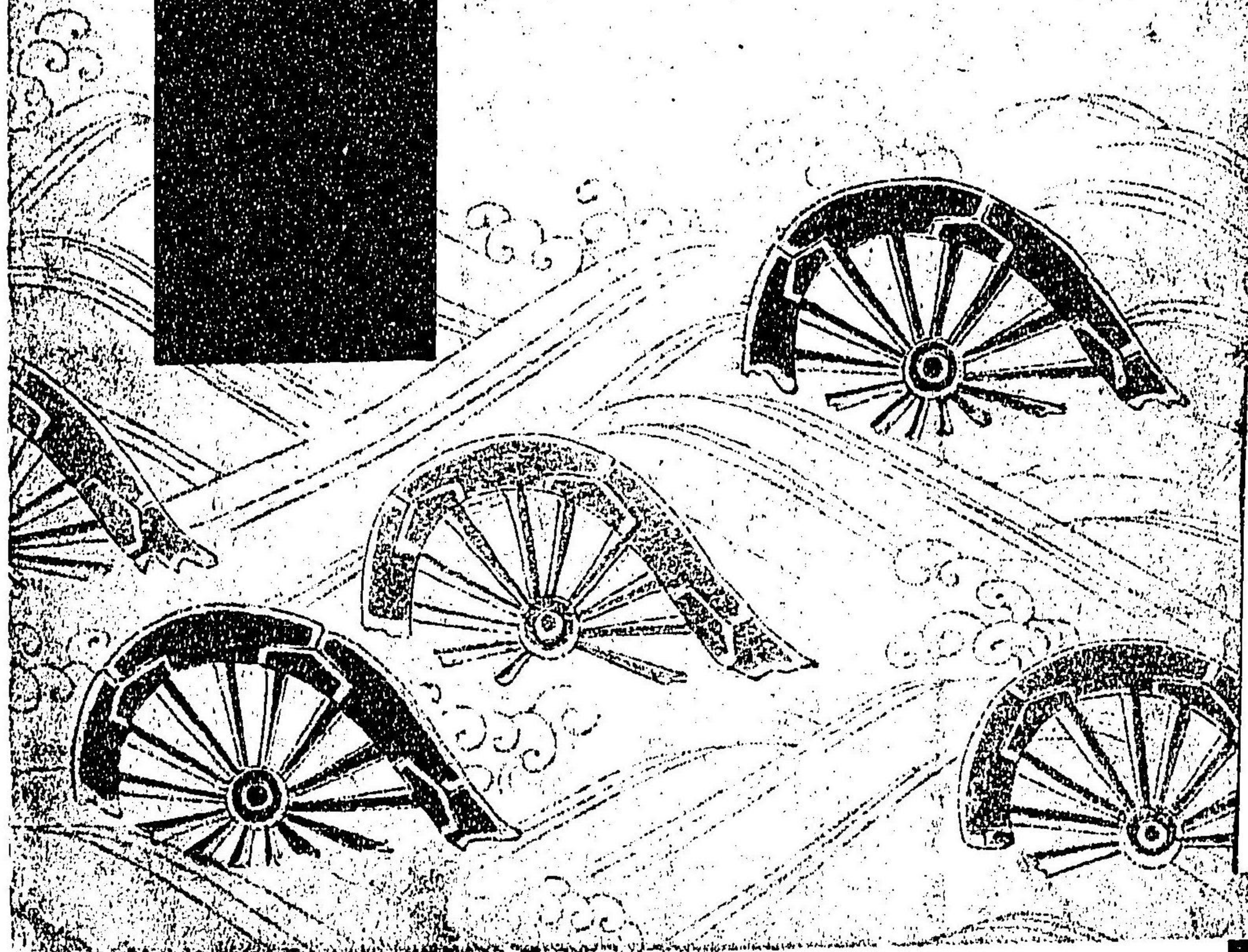
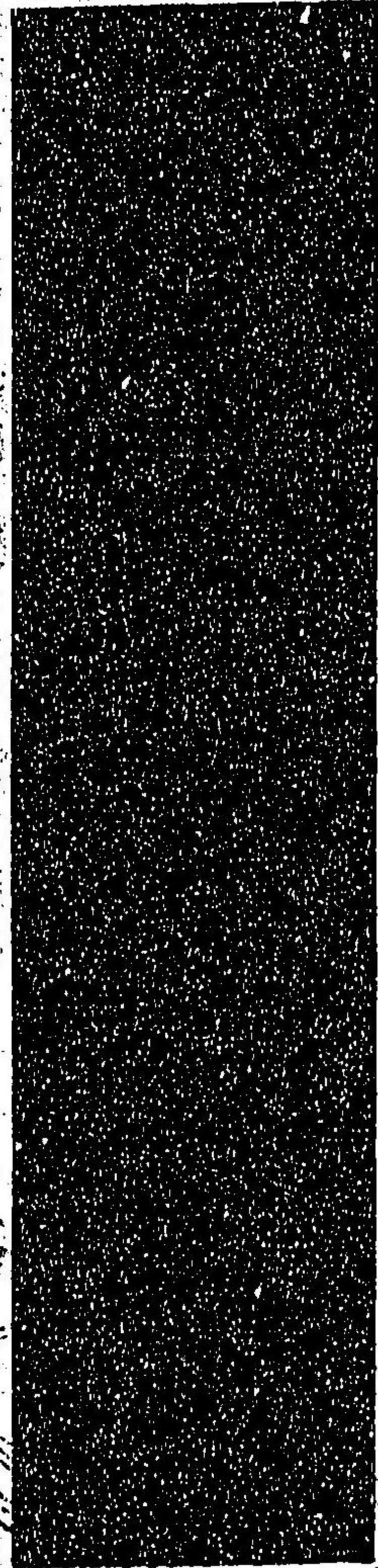


6315

特9

182

白  
之  
男  
著



095030-000-4

特9-182

薔薇娘

稻岡 奴之介 / 著

M35

DBQ-2628





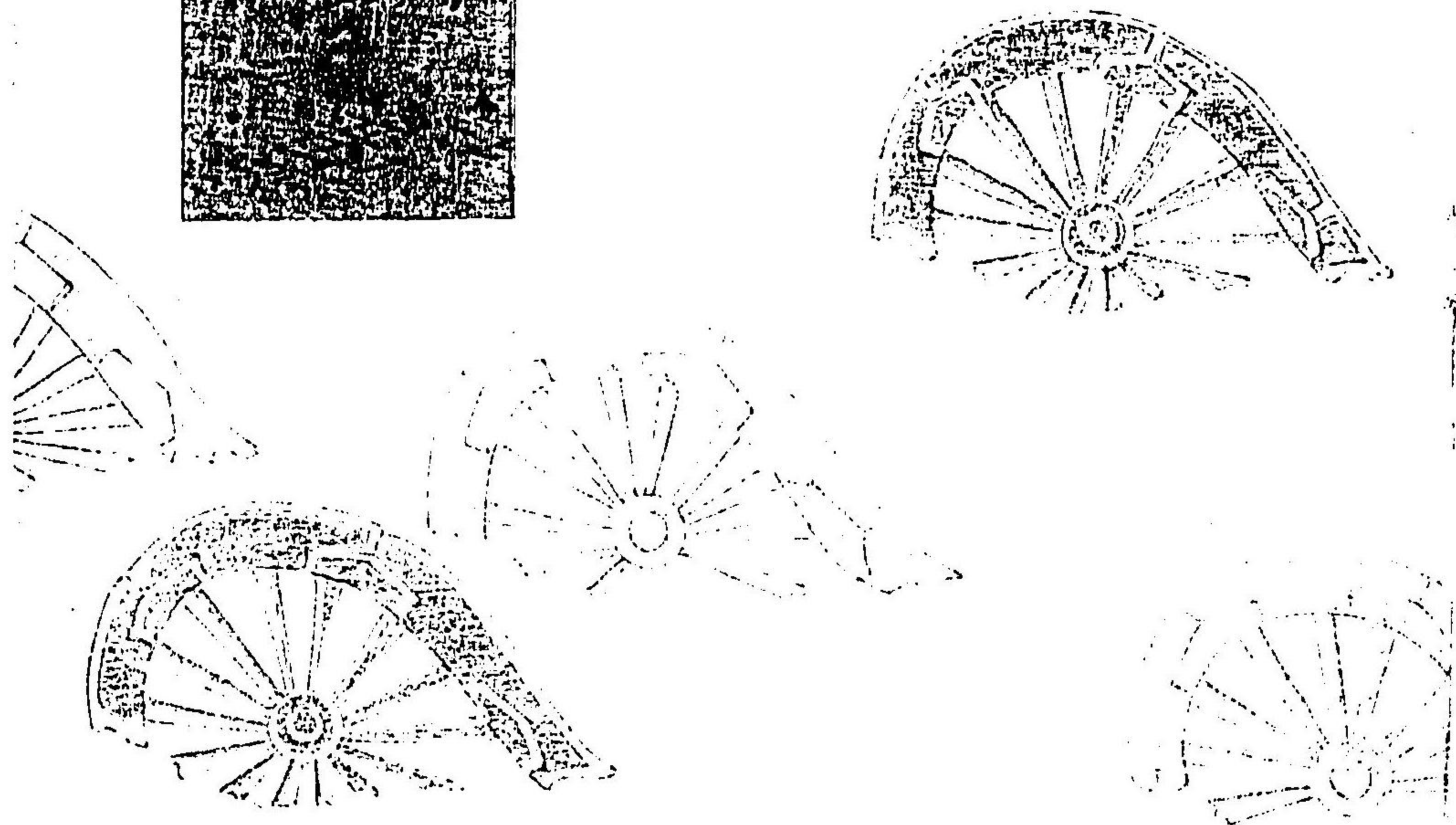
631F

特 9

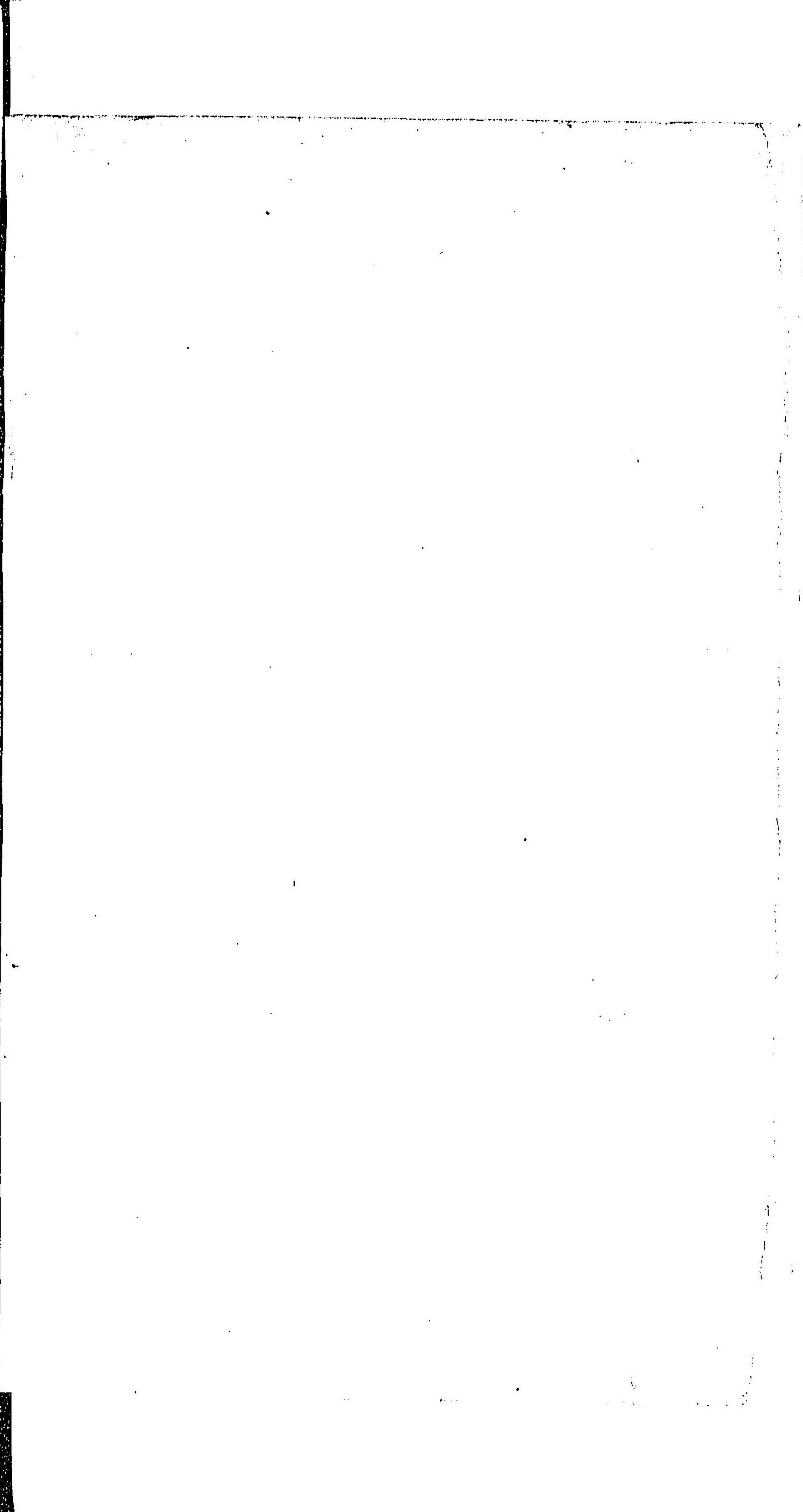
182



日人易著









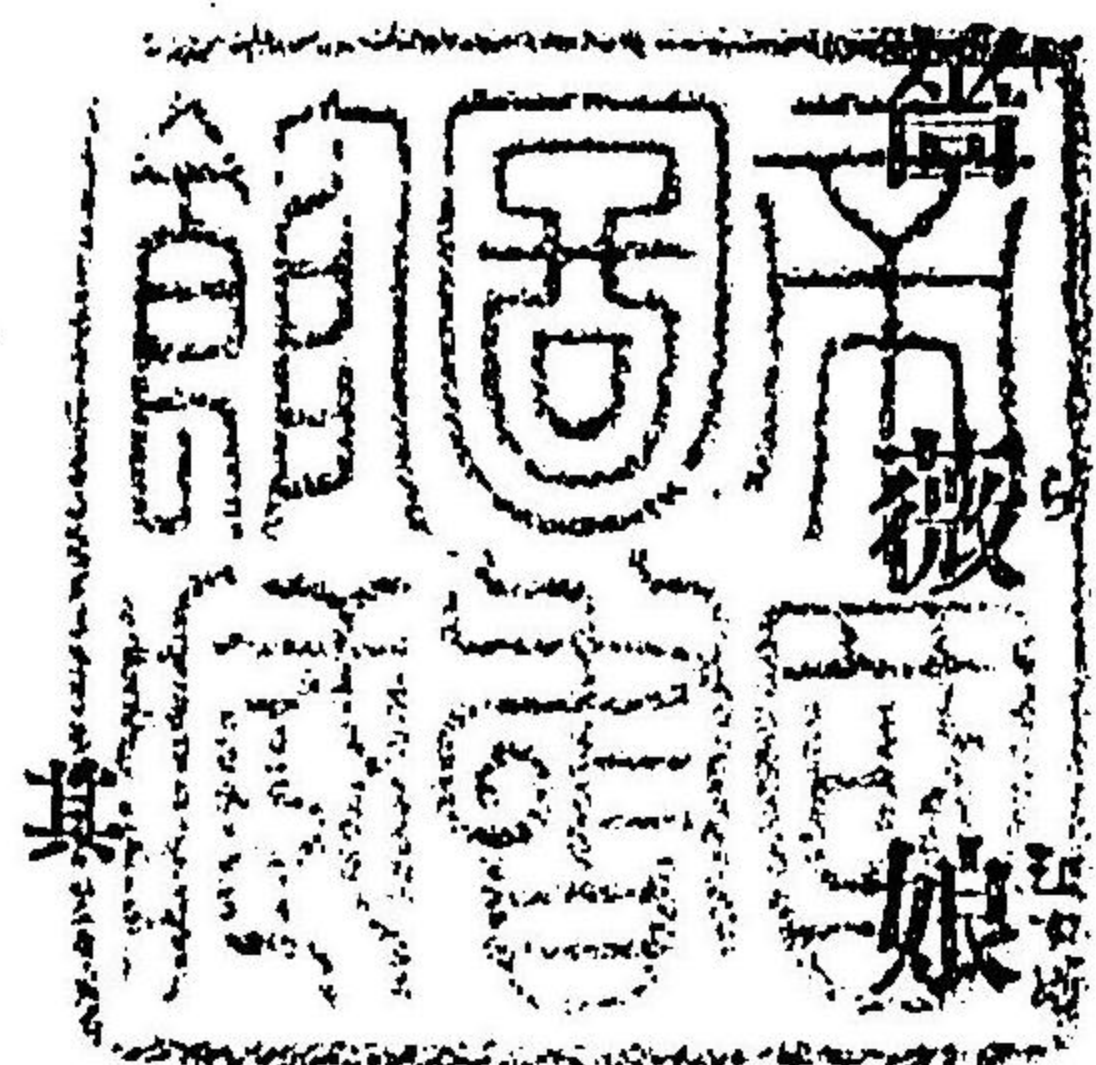




時9

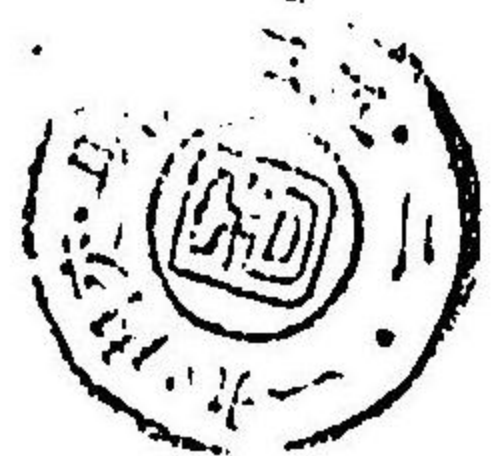
182

娘 ば



一

奴 之 介 著



秋の夜いたく更て遠音に響く鐘の音陰にしみり、露を命の虫  
 の音わたりて十八日の月朧ろに、天地寂寥として鬼氣人を迫  
 る頃、さらぬも寐しき野中の溜池を目指して、雪の双脛を踏  
 げもなく夜風に舐らせながら素足に大地をシトくと踏立て  
 つと、半狂亂にて駈來る女あり、年のころと二八あまひ、



漆の前髪句やかに髪のはつれ毛白き頬に亂れかゝりたるさま  
 甚も月とや見む花とや眺めむ、憂愁を含む眼元もし笑は  
 夜目には一入物凄さばかりの美形、あゝ不思議、夜更け人定  
 り而も盡なほ寂しき此邊りを街徨ふは何事いづれなんくの  
 深き理由仔細ぞあらむ、時は何時、世の勤王討幕の議論劇し  
 き慶應元年、土地は何處、うちはさす都の東吉田明神の北、  
 白河村の此方なる千草老茂れる野中なりけり、  
 女は涙にうるむ眼を睨りて池の面を昵と凝視め、さも悲しげ  
 にさめどく、涙に暮れしが、やがて心や定めけむ體を屈曲て  
 其處此處と路傍の小石を拾ひ集め、雨の袂へ押し入れ、左  
 右の袖をかゞげて重量を試み、さも淋しく什度も物凄き笑を  
 片頬に浮べしと見れば、又もや伏沈みて髪にユラユラと

小波うたせぬ、吉田山の樹々の梢を動かし吹く風冷たく、  
 月はいよ／＼曇り、萬籟死せるが如く、消然と佇立む女の影  
 は朦朧として煙に似たり。  
 折しも何處より何處に至らむとてや、彼方の經路を横切る人  
 影一個現れぬ、それと見るより女は慌て、兩手を合せ、  
 「叔母さん勘忍して下さい、不孝の罪は黄泉で、南無阿彌陀  
 佛」  
 間一髪身を躍らして池に飛込まんとす。  
 彼方の人影は稻妻の如く宙を飛で駆来りさま、矢庭に女をム  
 ツと抱止めて、  
 「待て、待て、ゑゝ不心得ぢや、待て」  
 「死なねばならぬ譯が、お放し、殺して」  
 「ならぬ、いや成らぬ、ソゝ其譯を、靜にいたせといふに、



事と次第によらば殺しても遣らう、なれど」  
 「その譯いへるやうなら、シ、死にませぬ、お放し、お見逃し」  
 わつと泣き叫びつゝ必死となつて身を跳きぬ、此方はなほも止めし手を少しも緩めず、一際聲を勵まして、  
 「人間死は易く生は難しといふ、徐に心を落着けて譯を云へ必らず悪うは扱はぬ此方ぢや、こりや」  
 力を極めて一間餘り此方へ引寄せながら、  
 「膝とも骸合とやらいふ古事もある、事と品によらば立派に死なせてもどらするぞ、又力にもなる、武士に二言はない」  
 何處までも優しき情ある言に女は今更ら心弱りて、打頭ふ膝さへ前後は亂れながら、なほ身をゆすりて振放さんとあせりつゝ、

「お慈悲深いお言に反きますにはあらねど、此世に永らへることば、御恩は夢さらく、お慈悲に此處を」  
 「いや罷りならぬ、武士が一度止めしからは金輪奈落、弓矢八幡に替ふて其まゝには見逃さぬぞ、見れば未だ年もやうくム、よく、辛い事あればこそ、察しやるぞ、如何致した早く云へ」

其二

月は曇れど心に曇りなき武士が眞實をこめたる言に、女は最早や争ふ事さへならず、其まゝベタくと大地に身を平伏し



て今は身も世もあられすヨと泣入りぬ、武士は慰むる言も  
 出でず呆然として雪より白き女の襟首凝視するのみ、露けら  
 草の葉末に虫の音清く、四邊は寂寥々々。  
 稍ありて女は首をもたげ恭しく兩手を支へて、昵と武士を見  
 上げしが、見れば色淺黒く鼻筋どほり、一文字の眉黒漆の如  
 く、なんとならむ愛嬌あれども何處やらに恐るしき兩眼の光  
 取る年二十一二とも見ゆる天晴れの男振りには、女は思はず見  
 惚れて餘念なし、やがてハツと我に歸りて、  
 「さるくお慈悲のれ言、まことに、何の御縁やら捨まする  
 命を御止め下され、何と御禮を申して好いやら、しかし、何  
 うあつても此まゝ宿へ歸ります事には」  
 「何といふ、家へ歸ることならぬとか、苦しうない者ぢや、  
 八幡他言はせぬぞ、包ます何事も残らず語れ」

「はい、お恥しながら、妾は、父も母もなき一人者、この吉  
 田の里に伯母と只だ二人で暮しまする、が、その、その伯母  
 が、真に申しまするも」  
 渠は差俯きて他を云はず、  
 「いや構はぬく、何のやうなる事も此處切りぢや、人に洩  
 らさう拙者でない」  
 と武士と膝を進めぬ、女は聲漉りながら、  
 「この頃神戸とやらに來てゐます異人どやらが、妾を搜索  
 ねるとやら、通辯人が態々京へ上りて纏綴よい女を探します  
 るも、唯一人行く者もなければ、困つてゐるといふことを何  
 處で聞きましたやら伯母が、その通辯にあふて妾をやると約  
 束しまして」  
 「む、何に、汝を外人に」



「仕度金とやら名づけて、大枚のね金を貰ひましたとかにて  
 妾を洋妾にと」  
 女は云ひさして恥かしげに口を掩ひ頭を垂れぬ、武士は身を  
 覆はせ刀の柄丁ど叩きて  
 「此、以の外のよし、其れより」  
 「伯母は家の繁昌金の蔓、明日から神戸とやらへ往て、その  
 異人の妾になれど、ソ、其れゆゑ、寧ろ身を」  
 今は堪らずわつと聲を放つて泣叫ぶ女、武士は聲せわしく、  
 「よし、よし、其れ故身をすて、耻辱を脱れんとせしか、わ  
 じ道理ぢや、汝は外人の洋妾になるを好まぬのぢやナ」  
 女は蚊の鳴く如き細き聲にて、  
 「こればッかりは、ど、いろく、伯母に詫びますれど、ヌ、  
 少しも、不孝者、聞分けない奴、妾しは、たとへ何のやうな

目にあふても異人なせに、シ、死な方が、旦那さま、こ、殺  
 して下さりませ」  
 武士は面上さつと紅を潮しながら、稍怒りを帯びたる鋭き聲  
 もて、  
 「いや殺さぬ、天晴れ汝が志見上ぐるぞよ、反つて伯母を思  
 ふ大の孝行者、感心致した、伯母とやらこそ、何くも神州の  
 ゑッ、汝の伯母に身共が逢はう、む、心配無用ぢや、案内た  
 のむ、案内せいッ」  
 外國人とさへいへば犬畜生にも劣るものと思詰り、日本の土  
 地を踏ますは素より、名を聞いてさへ肩を擧め眼をいからし  
 て罵り憤り、尙し大道の真中に行會ふあらば、忽ち肩を聳か  
 し大手を振つて突當りさま、  
 ゑ、無禮者と、大喝しながら青痰吐かけて悠々と通り過ぎ、



彼もし怒らば我に神州龍蛇の氣ありと呼はり、抜打の牙を  
 拳に人間貴重の命を宛がら背戸の畑の太根を見る如く、ズバ  
 リくと斬捨て、快と叫ぶ當時の習慣、  
 されば神州は太陽の出づる處元氣の初まる處、と乳母が背に  
 おはれながら紅葉の手を叩きて月さん何んぼを唄ふころよ  
 り、自然と叩き込まれたる一片犯すべからざる武士氣質、骨  
 髓に宿り腸に浸渡りて、癒て物心知る十五の頭より今年二十  
 三の今日が今まで、勤王といふこと、攘夷といふこと、他は  
 何事も知らぬ此方の武士、女が終始の談話聴いては楯も矢も  
 堪らず、只さへ盛上るが如き兩肩いよ／＼いからせ、  
 たどひ伯母の威光にもせよ金が欲しきにもせよ、日本の土地  
 に生れ日本国民となれるものが、大事の娘を洋妻に賣りて已  
 が口を肥さむと、借も不届至極不届千萬と、一時胸元目掛け

十

てひらくと突込みきたる日比の洲、我知らず躍上りて位  
 入る女が手先ぐいと握りて、  
 「さあ来よ、身共が汝の伯母に申聞ける」

其三

今更の如くまたさめ／＼と泣伏す女を後邊に、大刀の柄に手  
 をかけながら憤怒の兩眼を見張りて仁王の如く直立つたる武  
 士を、徐に見上げて冷やかなる微笑を片頬に浮めつゝ、片手を  
 長火鉢の縁に凭せ片手に煙管を杖つき、毫しも騒げる色なく  
 落つき拂つたる年頃四十四五とも見ゆる女あり、女は嘲る

十一



く両の眼に愛嬌を持たせて、  
 「ホ、静にして下さい。婢は一人も居ぬのさ、いろく御親  
 切のお言は嬉しういませすが、娘は妾が切つても切れぬ親身  
 の姪、はい煮て食はうが焼て食はうが、は、は、は、は、は、は、他人様  
 の御世話は受けませぬ、とさ、云へば其れまでの話さ、だが  
 茲に云ふにいはれぬ入用があつて百兩といふれ金が要ります  
 のサ、其れさへありやア、なんの可愛い姪を神戸三界まで遣  
 りませう、ね、お分りなんでせう」  
 糞よりさまぐの無禮雜言聞くに堪ぬかね、總身の皮肉勁い  
 て今にも飛かゝらむ怒を叱とこらわて、額に青筋二本まで膨  
 めたる武士を、女はじろりと上目に見上げてホ、ハ、ハ、  
 「これさお武士、お前さんも男なら一旦云出した言は引けま  
 すまい、さ、何うして下さるんですよ、妾の宅に是が非でも

ば  
ら  
ば

百兩のお金が要ればこそ、大事の大事の姪を赤嶺野郎にさし  
 にさせますのサ、なんの其お金さへありや、ね、爾うでせう  
 それを廢めいと御親切に仰しやるからには、此如才はありま  
 すまい、お前さんも立派な御武士、耳を揃へて百兩の金を此  
 處へお出しなさい、それが出来なきや、お氣の毒様でも娘は  
 神戸へ遣りませよ」  
 見れば瓜實の細面雪を欺き、笑ふ毎に露や涙れむ無限の愛嬌  
 あだめき、たしかに出一匹も殺しぬはせの優しき姿持ちな  
 がら、さては何處を押せば斯る怖しき音の出づるぞ、此方の  
 武士は愈々呆れて言なく、握り詰めし双の拳をふるはせなが  
 ら、益々眼をいからせて其顔凝視ひるのみ、  
 女は悠々と煙草の煙を輪に吹き、その吸壳を火鉢の様にて  
 ンと叩き落しぬ、

ば  
ら  
ば



十四  
「旦那、御返答は何うです、百兩といふお金耳を揃へて出て下さいますか、人様の宅へがなつて來なすつて罷をして、尻尾を曲げてお歸りなさるかホ、ホ、」

其四

女は煙草の煙をふツと吹きて、  
「懨りながら什麼お武士様でも將軍様でも他人の子を自由に成りますまい、ね前さんも男いや、お刀の手前、ホ、ホ、百兩の金が立派に出來ませう、それさへ出來りやア、この娘を赤髭の妾にすることは只今やめませ、だが、何うやら危い

ものそれが、成らねば無理な御相談サ、はい、娘は妾の姪、妾が自由自在にしますのサ、成程、投身をお助け下さつたは改めてね禮も申しませうが、其れは夫れ是れはこれ、へん金もない癖に、ちやん茶羅阿しいや」

「ナ、何にッ」

女は片手に口を覆ひて憎々しげに打笑ひ、

「は、は、は、は、腹が立ちますか子、なに斬る、面白い斬られませう、さ、斬つて貰ひませう、すッぱり斬つて貰ひませう、骨もあれば皮もある身體、易々斬れるものなら斬つて下さい見事立派に此處を」

シリく、と巳が身を武士が足元近く摺り寄せ、肩を突出し雪の細首を指さしながら空嘯きつゝ、  
「お斬つた、斬れ、鈍刀が怖ろしくッて此世が渡れるもの



が、遠慮はいらぬことサ、すつぱりお斬りよ」  
言語同断の無禮に武士は早や是れまでと左の親指もて鯉口ブツリと切つて、

「望みとあらば、汝ぬッ」

あはや血煙たつて女の五體二つに成らんとする間一髪、今まで泣伏しおし娘は透さず身を躍らして兩人が中に割つて入り

「あれ、拜みます、伯母の重々の御無禮の段は、こ、この通りく」

「ゑ、退けく、邪魔すな、退けくッ」

「サ、お腹の立つは御道理なれど」

伏拜みく雲の鬚髪ふるはせながら、口説きたて泣詫ふるいちらしさ、流石の武士も少し躊躇ふを見て、女は猶も別走りたる聲ふり絞りて、

「殺して貰ふのサ、ゑ、お逆其處退いた、かうお武士早く斬つて下さいな、へん貧乏神めがッ」

あくまで口を極めて罵る不敵さに、武士は愈々堪らず躍りかゝらんとするを、お逆必死となり絶付き押戻して、涙に濡れし花の顔ふり上げつゝ、

「お願ひ、たのみます、何卒、何卒」

若年ながら武士は當時故里佐賀の藩中に不敵者を以て聞えし井牟田左文治とて、日比は人の二人三人斬捨つること猫の子

一匹殺せしほにも思はぬ大膽者ながら、相手は高の知れたる女といひ、而も古今に秀でし美形が涙もろとも両手合す哀れのさまに、名ある剛敵に向ひしよりも心後れて、思はずよろくと二三歩退き、叱と女を腕結めて無言なりしが、稍ありて少し言を和げ、



「免し難き奴なれど、命は汝にとらする」  
聞くより女は又も驛謀がしく、

「免せぬ奴、ゆ、ゆるしていらぬ、サ斬んなよ、斬らぬか、

は、は、は、斬れまい、さあ此處は妾の宅だからトットと出て

去て貰いたいのサ、こゝな胴貧乏めッ」

武士は何時しか心を沈めて更に取合す、徐に懐中探りながら

ッロリと女を見返りて、

「さても、利慾の他には何事も知らぬ賤しき女斬るも刀

の穢れぢや、娘があはれに免じて暫らく免し措く、左程金が

欲しくばソレ取らするワ」

片手に掴出したる胴巻、女を目掛けてハタと抛付くれば、中

なる黄金の封目切れ白縮緬の胴巻は宛がら蛇が蛙を呑んだる

如く、ぞろりと壘の上へ渦巻きぬ、

見るより女はくづせし膝を遂に立直して、

「は、は、は、本統にね前さんは氣の好い方さ、初めッから附

うなさりや、なんの彼是いひませう、ね迷ね茶でも差上げな

武士は再び怒りの聲劇しく、

「黙れ、聴くさへ汚らはしいはッ」

叫びさま止むるお迷が手を振拂ひ、身を翻へして一徹に表の

方へ飛出しぬ。

其五

お迷の叔母といへるは八町手足のれ金とて知るものは名を



てさへ身毛を脱いで恐るゝ毒悪無惨の曲者にて、今年四十  
 七の驛の毛ヲハラ霜降れど、それを黒粉にて塗隠せし薄化  
 粧の仇姿見事年の七ツ八ツを若やがせて水々したる太り肉  
 聞けば髪時は祇園町に左裙もちて花の都に花香と名乗つて只  
 ならぬ花を咲せし大の仇者とやら、生れ落つると其まゝの悪  
 性何處までも圖太く、偷し此客と懐中の暖きに目星をつくれ  
 ば、よしや相手は石の地藏様と金の阿彌陀佛を油で煮ころば  
 せしはどの堅固者なりとて、眼千兩と呼ばれし両眼に思ふ存  
 分物を云はせ、纏て首尾よく我物と望み通りに成りし曉は、  
 泣いて笑ふて怨んで悶て、處嫌はぬ手管の齒形に親より喰ひ  
 男が五體を、あはれ生れもつかぬ瑣物にしなから、肉を食ひ  
 血汐を吸取るまでも尙他足らず、男尾羽うち枯らせばボンと  
 突出し、唇を叩いてれさらばくと見返りもせず、されば花

香がために身代棒にふりしもの京に十人伏見に五人、とは倍  
 も恐ろしの女かなど、末は誰取合ふものもなければ、花香さ  
 らに愛しども辛しども思はず、折節かゝる田舎の、上り客を  
 吸上げ絞り上げて尙も已む懐中肥しぬ、  
 そもや振分髪に十二三より三十五といふ春の頃まで、あらむ  
 限りの不品行にさんく、泥水呑盡したる上、何時しか類は友  
 呼ぶ千鳥の三次といふ悪徒と馴染め、或夜祇園町の砂を後足  
 に蹴つて二人手に手を鳥が啼く東の空さして通行さしが、東  
 海道は鞍子の驛に足を止めて、あはれ好い鳥かくれかしと恐  
 しや心ありて張りし網の目と知らで、往來の旅人お金が美貌  
 に迷ひ路金の財布を叩き拂ひしもの数知れずといふ、  
 されどお金とても五體に血汐のかよふ人間一人なれば、人知  
 りず眞實に愛身をやつす神ぞ可愛の男は出来ぬ、さても笑止



や悪女の深情けなげねを已が心の極悪非道なるだけ愈々この  
道には弱く、只一筋に思詰めたる心の駒の狂ひ猛りて是も非  
もなく、驛に一二を争ふ佐野屋といへる旅籠屋の一息子、  
源二郎と呼ぶ色白肉の二十男にボンと身を抛出してはま  
込み、人目忍びし夜毎の逢瀬に眞實神なら誠を盡して、未だ  
戀知らぬ源二郎を他まで嫁しがらせし果は、この毒婦なんと  
か男を説きけむ、千鳥の三次といふ亭主のあるも掛はず、何  
時のほせにか佐野屋へ乗込み思ふ男と世間晴れての夫婦とな  
りしが、俗この世に唯一つの邪魔者は千鳥の三次なり、幸ひ  
今は旅稼ぎの留守なれど明日にも歸らば何とせむと、三日三  
夜の思案を凝らして、あゝ不敵なりけりある夜一天墨を流し  
て四方黒闇々たるを幸ひ、昨日旅より歸りしまゝの三次をす  
かして列樹へ伴ひ、かくせし出及庖丁にて三次が脇腹ツブリ

ど一えぐり、苦しむ男を闇夜の星明りに透して冷かに笑ひし  
鬼神も及ばぬ毒婦なりとは、惚れし目よりは源二郎などし  
て覺るべき、我には親にも似たる年増のお金を三國一の嫁細  
察と喜び男むうたてさ、

其六

れ金今は可愛最惜の男と朝夕の起臥神を嬉しく、曩日に異り  
し起居動作あくまで優しく、一年の月日夢と消えて、明る年  
の秋風肌に浸渡る頃、戀聲の源二郎風邪の心地にて打臥せし  
より枕上らず、可憐や其歳の霜月七日の夜半過ぎ、戀女房の



お金の手をヒツと握りながら散りゆく木の葉と共に散るな  
 りぬ。  
 お金はより世を敢果なみ、日比の悪性にも似ぬ佛いざりに日  
 を暮せしが、打續く不廻りに家内は追々左り廻りとなりゆき  
 源二郎が一週期までは何うなり斯うなり佐野屋の看板に瑕も  
 つけず、其日々々を送りしも天道何時までか悪人に興すべし  
 佐野屋の後家は元京の祇園の藝妓にて、千鳥の三次といふ無  
 頼漢と足扱して此處へ流れつさしもの、其上亡ならし源二  
 郎殿と夫婦となりてより、權太を邪魔者として列樹で出入  
 丁の手料理せし大悪女と、雖いふとなくバツと驛中一面に弘  
 がり、果は番所の役人が耳に入りたりと聞いては流石不敵者  
 のれ金も尻こそばゆく、ある夜金目の品のみ風呂敷に包みて  
 ヤンヤラやあど引擔ぎ、さして往くべき先もあらざれば、再

び都に舞戻り吉田の里に身を措きつ、兄なるもの、隠し平  
 なるれ遊を何處よりか見付出し、又もや浮世に罪つくらむと  
 鶴の目鷹の目見張りて狼ふなりけり。  
 爪の莖に茄子はならぬ世上の諺いつはりならで、お逆成長す  
 るに從ひ伯母に似て心あくまで太く、天真の美貌繪ける天女  
 の如きにも似ず、七ツ八ツの頃より手癖あしく、十三四の頃  
 より種々の淫戯を盡せど、お金更らに叱りもせず、世間並に  
 伯母姪ならば此様なる娘未は甚慮と眉を寄するが定なれど、  
 お金返つて行未頼母しく思ひ、三味線太鼓と浮氣らしき事に  
 丹精を込めて育上げ、女は男を欺して金を取るものと口にて  
 そ云はね自然と教へし天晴れ立派の仕つけ、あゝ此伯母にし  
 て此姪ありとは當時吉田の里にての流行語とはなりけり。  
 たどひ悪人なりとて切つても切れぬ伯母なり姪なり、その姪



が生命を救はれし大恩人に有らん限りの悪口雑言を盡して、  
 なに百兩といふ大金うまくと詐り取るとは何處まで悪性や  
 ら底知れぬね金、あはれ戀婿の源二郎此世を去りし當座は、  
 鬼の目にも涙とやらかお金聯珠の如き大粒の涙ぼろくと溢  
 して泣かれ、思へば今迄の身持放埒さても恐ろしや、今  
 日といふ今日は積年の夢覺めたり、以來は心を入替わて身を  
 慎み、一生涯後家立て、懸ては貴郎の跡追はんと位牌の前に  
 誓ひし一言は何の爲ぞ、焼付けし鍍金は時來れば削げるもの  
 か、見より再び現はす今日この頃の本性、持て生れて毒惡心  
 所詮焼直さねば眞人間となる事覺束なし、  
 お運は立去る左文治が後姿を叱と見送りて呆然と立佇みしが  
 稍ありて力なげにベタくと坐して、鼠の後れ毛指先にのま  
 みつ前歯もてプツリくと噛みながら物思はしき風情、其れ

を見返りもせず、伯母のお金ホクくと笑こぼしつ黄金の數  
 を數へ、人差指と親指もてピンと弾きて宙に跳上げ、  
 ヒラくと落來る山吹の一片を掌中に受けとめ、はくと心地  
 よげに笑ひぬ  
 「何時見ても悪くはないよ、四十年が間鉢ひ上げた胸サ、へ  
 ん異つたものさ」

其七

四十年が間鉢上げた手腕へん異つたもんだらうとは、浮世の  
 伯母が姪にいふ言とは受取れず、お運冷かに見返りてセ、ラ



笑ひ、

「ふ、大平樂も唄ひしだいさ、閑子鳥さへ鳴かない彼の淋しい野中で、演劇のほかには見た事もない狂言を真面目腐つて勤める役割と、憚りながら一つに云はれては困りますのさ」  
ぼんと鉈を放ちたるまゝ、  
「少しながら小唄を歌ふれ、さすがお金も取られて眼を丸め、稍暫し凝視めて言なかりしが、やかて、

「大それた見暮だね、だが子ね、惚た男のためにする仕事と思やア、真更らでもあるまい」

「は、御託詮なら大概にして戴きませう」

「誰が何時れ前さんを馬鹿にしましたね、かう聞きねね、こまでね前を仕込むにや並大抵の物入りぢやねねせ、毫とは妾の心にも成つて見るさ、自分ばかりの我まゝもさうくは通

らぬ世の中、

そんな事ぢや末が案じられるよ、何時まで経つたッて好い悪黨にやア成れないのさ、辰さんの半分もれ前に手腕がありや

妾も餘ッ程樂だが」

「左様サ、何うせ妾の腕がないのさ、人の戀人を横取りするやうな手腕はないのサ、あゝ嫌だ」

聞くよりお金柳眉をつり上げ膝向直して、

「おや、お前妙なことをおいひだね、誰が何時人の戀人を横取りしたとね、ね前此頃なんどなく辰さんを取怨みだが、辰さんが若し浮氣すりやお前も負けぬ氣で存分飛ばすが可い

サ」

「妾なんかのお多福には相手になりてが無んですよ、何うせ捨られものなのさ」



折しも格子戸ガラ／＼と音して、

「阿母ア宅か子」

いひつゝぬッど半面差出したるは顔色他まで白き二十歳ばかりの美少年、お納戸辨慶縞の袷衣に白地の浴衣を重ねて、入りの丸くけ帯をグイと横さまに結びたるは、見るからに一癖ありげの道楽者仕立なれど、のつべりしたる顔つき何處素人染みて、乳の香失せぬさま

借は此奴まだ悪態の仲間には除まり持てぬ奴と見なたり、

「れ、辰さん、何だね他人行儀にそんな處から頭を出して

さ、お巫山戯でないよ、ね這入りな、誰も取殺しやしないか

ら」

いそ／＼出迎へて腕元溢るゝばかりの愛嬌たゝぬ、美少年が

手をとりに引入るれば、お逆は横目にシロリと見遣りたるまゝ

物とも云はサツンと澄して取合はず、美少年はぐツとお逆を見やりて、

「かう何うだい、例の一件は、相手が堅固の奴さんと來てる

るから若やと大心配なに大極上々吉だどむゝ有難てぬ」

其まゝ火鉢の前に大胡坐、懷中より訛豆煙管取出して煙草く

すべながら、此奴らの癖として何の功能にや「かう」といふ

冠詞を被せて、

「かう阿母アてねげねにしなよ、また二人で喧嘩でもおッ初

めたのか何だか變だせ、お逆さん鬱いでるぢやねぬか、否で

もわらうが辰さんの御入來だ、むゝ嫌に澄してやがるナ、籠

棒め、誰だと思んだい、可いや勝手にしろ、あゝ折角來た甲

斐もない、糞縁起でもねぬ」

云へどね逆は尙彼方を向きたるまゝ見向きもせず。



「何うしたのだ、たい、今日の仕事の手前の氣にいらねえな  
ら詫つた、此通りだ、お蔭でね互々に百兩といふ大金にあり  
ついた心祝に一杯やらうぢやねえか」

「今しも勝手へ立ちしお金の後姿を見送り、美少年はお逆が袖  
を捉へて慰め顔、お逆は捉へし男の手を拂ひ退け、

「あゝ放しておくれ、辰さんお前は嫌になつたよ」

「ナ、何、嫌だと」

「爾うさ、自分の心に問へば解るのさ、お武士の古手てねは

「爾うしたのか」

「ツイと立上つて奥の間へ駆行きしまゝ姿も見せず、一々針持

つ首の飾々さてはとばかり、美少年は小首を傾けて思案に沈

みぬ、思ひは同じお金も顔色かゝて出来り、そつと知らする

眼元の合圖、美少年は傾き、

「いゝさ、心配はねえ、萬事はおいらが胸にあらね」

「お金は奥の方窺ひながら美少年が側近く膝摺寄せて、覗くが

如く眠と見詰むる眼元に露宿らせつゝ、

「だつてね前、知られたからッて此儘にしちや、とり殺すよ

可いねえ、あゝ、あゝぢれッてね」

「あッ痛エ」

「ホ、ホ、お忘れでないよ、さつとだよ」

「じろりと流し目に見やりし眼元の否らしさ、これが五十路真



近き女の業とはさりとては、元は肥前國佐賀の藩中に先祖よりこの美少年元來なもの、相傳の馬術もて家祿二百石を食む近藤孫術が一子辰馬とて、藩中双びなき美少年なれど、生れて放蕩無頼の遊野郎にて己が天成の美貌人に優れしをたのみ、唯彼の論なく家中の娘をそののかして屢々親を泣かせ、文學武藝は其方退けにして毎に机にむかひ女に贈る文のみ認め、親の異見も友朋輩の忠告も犬の耳に念佛はとも聞入れず、果は善からぬ勝負事に夜を更かすなど、言語同断の品行敢へもならねば、双親も持て餘して如何はせむと思ふ折から去る歳の正月同藩に去る者ありと聞ゆし井牟田左文治といへる少年と、御前試合の晴の勝負に二目と見られぬ不覺をとつて殿の不興を蒙り、

その上遂に父の勘當まで受けたる一藩井ふものなき慥意者もさすがに武士と名のつき男と呼ばれたれば、左文治が勝面あくまで憎く、たのれ折あらばと恨みの一念片時やすまる隙もなく、國を立退き兩刀すて、諸所を漂泊しながらも、時來よかしと左文治を狙ふ奸悪邪智、おのが不熟を思はで能者を怨む曲者なりけり、あはれ斯る類のねじけ者今昔どもに多きぞかし、



其九

人の心や今日この頃の空模様降るでもなく降らぬでもなし  
さと吹く愛宕山の峰の風身に浸みて老人は火桶欲しやと咳く  
頭なるに、さても何處の誰が好奇にや、四方の障子堅く閉し  
たる家根船一艘、渡月橋の上流、嵐山の麓、紅葉ちる千鳥ヶ  
淵の邊りに繋げり、中なる主や誰とも床しき三味の音潮を流  
るゝ水の聲に和して、折々男女の笑ふ聲小僧し、  
秋の夕陽は峰の梢に茜の模様おきて織なす錦も及ばず、それ  
さへ聴て漸次に黒みゆき、三軒屋の透りにチラホラ燈火の光

わらはれ、微かに聞ゆる小歌は誰がすさびぞ、入相の鐘の音ほ  
んと水をつたふて物淋しき頃、船の方に胡坐かきつゝ、貫ひし  
酒肴は早や飲盡し食盡し、こくりくと夢に入る見るからに  
悪相したる船頭一人、襟元ねふる冷き夜風に戦慄しながら日  
を覺して、ムクと起上り、双手を思ふ存分高し差伸しつゝ、  
ニヤリと物凄き笑をもらして家形のうち差覗きぬ、  
「お客さま、日が暮れちやしたせ、ぼつゝ、歸るとしやう」  
家形のうちよりは優しき男の聲して、  
「むゝ遠ねね、阿母ア歸るとせう」  
「あれさ、せわしない、船頭さん未だ歸らなくつても可い、  
外で寒からうに、今一杯呑んで往きなす、サ此熱いのを」  
いひつゝ、障子引開けて半身差出したるは一目にぞつとすするば  
かりの美形、色真黒き船頭が鞆面斜に見やりてニコリ。



船頭は陽気たちのほろ茶碗の卵子酒、咽を鳴らして飲みながら、時々鏡き陣を定めてテロリく、と家形の方を見やるさま、何れ一癖只とは見ぬや、稍ありて家形の中にあつと一聲、續いて男女のうめく聲聞ぬ、船頭は首を縮めながら眼を眠りて、へへへへへへ、と薄氣味悪く笑ひぬ。

やがて船頭はペロリと赤き舌を吐て、手荒く障子引開け首をし入れ、

「ね運さん、旨くいさやしたねへへへ」

さては道の女た道と見ぬたり、お運は半面襟に埋めながら、苦しみ臨くお金と辰馬を見詰めた、片頬に冷き笑うかべて

「ホ、伯母さん堪忍しておくれよ、是もお前が妾の可愛い情夫を寝取つた醜ひだからね」

さりどては姿にも似ず心は鬼の如く蛇の如く、よしや什麼な

る怨みあらうども、現在血と分けた叔母、天にも地にも只一人の伯母を毒殺するとは、稀るじの女め、たゞ其れのみかは一夜でも半夜でも最惜し可愛と云交せし男までもゝるどもに殺して退けんとは毒悪非道、と辰馬は口惜しき無念さに身を悶わながら、血糊に染まる蒼白き顔と恨めしげに振上げ

「お、ね、おのれッ、コ、殺すのか、ち、ち、畜生ッ」

「あッね寄りでない、妾はお前さんに未練は最う少しもないのさ、ホ、ホ、ホ、苦しいかへ、あたりまへさ、ホ、これ辰さん能く物をお聞きよ、お前さんは餘まりな人だよ、妾に散々苦勞をさせて自分が良い氣に成つてッ、現在叔母さんと痴々線合ふとは呆れて物が云へないよ、何うせ其位な罰はあたるよお前さんがた云ひには、井牟田左文治といふ奴は國許で御前試合にさんぐな目に遭せやがつた恨みがあるから、時來よ



かしと覗つてぬたが、聞きやア此頃野暮にも勤王とか討幕とか六ヶ敷い御説を吐いて、同志の者と遠からず江戸へ下るッて、其路金の百兩といふ金を預つたを黒い目で睨んで置いたから、手前が腕で旨く此方へ巻上げて呉れりやア、左文治は預つた金を無くした麻で、恥と同志とやらから殺されるは必定、さすれば手を下さずに日頃の恨みを晴す道理だからと頼みだから、他ならぬ前のためだと思つて踏みなれぬ舞臺で一狂言首尾よく勤めてのけたのに其恩も思はないで、れ前さん彼の晩伯母さんに何かお云ひだぬ、れ前に見替る花もないが、お運坊は斯ういふ玉に使はなくツちやならぬから、可愛がつてゐる振をするのサ、とお云ひだらうあんまり、人を馬鹿にねしないでいよ、叔母さんも、叔母さんは、情夫と心中するんだから少々位は苦しくつてよ、嬉しいだらう、あゝ

れ退きよ、氣味の悪い、ホ、ホ、ホ、

其十

日高川にて蛇になりしてふ消姫がむかしは知らず、戀の恨みに一念のぼせ上りて、柳眉を逆立て物凄き兩眼を見開き、人が苦しむ状を心地よげに眺むる不敵のお遊、やがて傍なる煙草とも上げて静に煙草の煙を吹出しぬ、餘りの圖太さに船頭思はず首を縮めて戦慄すれば、ね金はのたりながら還寄り、頭ふ片手を上げてお遊に武者振り付かんとすれど、酒に浸せ







くど水鳥の羽叩く音 一入物寂し、

心弱しとれ選すくりと起上り、綱らば血糊ズルくとして氣

味悪き二人の死骸を力にまかして舷に引摺りゆき、両眼の眸

を定めて四邊を透しながら聲を潜めて、

「おい船頭さん、お頼みだよ、好よ、解つてるよ、此處へら

へ」

「れ選さん、思つたよりやアれ前も、餘ッ程、へ、へ、へ、

いひつゝお選に力を合す船頭、見れば見るほど無惨の死骸に

二人は小聲に、

「南無」

と一聲、左右等しく力を極めてドンと舷より投込みぬ、水煙

さつと立ちて死骸は流のまにく姿かくれて、お選が手にお

金の黒髪三すじばかり残りぬ、

「あゝ氣味の悪い」

「へ、へ、へ、お選さん、彼處にぼんやり立てゐるのは人で

すせ、而も二人」

「るゝ、冗談はおよしよ」

折しも颯と吹く川風冷かに、雨さへポツリくと降出しぬ。

其十一

世に養ひ難きは女子と小人なりとは實に真理たりけり、され  
ば女は心小なるもの、何事につけてもキナク思ふもの、泣



き易く、笑ひ安く、喜ひ易く怒り易し、  
 一念抑うと思ひつめては萬難をも忍ぶに強く、日比は確に揚  
 子一本けづる力なき手先もて鐵壁をも押貫かんとするが常慣  
 なるに、まして生れて不敵滅法のお逆、  
 神ぞ最惜しと思ひし大事の男を奪取られたる上、ならば二人  
 の中を裂かんと手を替へ品を替へて水さゝれては、何として  
 暗々其まゝに居らるべき、男も男なり、逢瀬の睦言には何時  
 とても嬉しがらせて措きながら、寄らば句ふ若木の花を深山  
 がくれの老樹の色に見かへるとは、るゝ口惜しや腹立しや、  
 この上は可愛さ餘つて憎さが百倍、  
 毒食は血まで舂れとやら、見よや女の一念思ひ知らしてく  
 れむと、さりとは不敵なり、船遊びに事よせて叔母と辰馬  
 を伴出せしお逆、酒に浸せし青蜘蛛の毒薬もて同時に二人を

殺し、自ら手を下して其死骸までも水に蹴込みし圖太さ、開  
 關以來斯る毒惡不逞の女又と一人あるまじと流石に悪黨の船  
 頭さへ思はず舌を巻きぬ、  
 「かう船頭さん、權さん、約束の骨折代たよ、少いがね」  
 帯の間より紙包取出して投遣れば、船頭は恭しく押藏きて、  
 「む、剛氣だ、難有てね、先づ念のため鳥渡本尊拜み奉つて  
 やッ、かうお逆さん、山賊ぢや不可ねねせ」  
 「何だどね」  
 「全體こら幾金だッ」  
 「大枚五兩さ」  
 船頭はソリく、と身を進めて、懐ろ手のまゝ空嘯いて澄し込  
 んだる水逆が鼻先へヌツと面差出し、額と額と擦合んばかり  
 にふツと臭息吹掛けぬ、



「あゝ、鬼いれ退きよ」

「なんだ退け、かう聞さねぬ、こら五兩だねぬか、折角だが返して遣らア、人間二人の生命が五兩だア一人前に二兩二分

の生命、おきアがれ、

一體全體おれ様を誰だと思ふんだい、うじ虫の權太と云やア

東海道は思か三ヶの津に鳴響いて三才兒も泣止む阿兄たぞ、

五兩十兩の目腐れ金が欲しさに人殺しの手傳いは頼まれぬ

フ、能り違やア三尺高い木の空四の五の云はず往生遂げる覺悟で

かゝつた仕事だ、籠棒め、あんまり人をみくびるない、お多

福め」

「おやく、長い文句だねゑ、五兩が氣にいらぬ」

「知れた事だッ」

「ホ、ホ、ホ、怖い事ねゑ、氣にいらぬさや氣にいらぬで話はずつてるよ、那處に怖い御託を并べられると妾は至つて臆病者だからお腹の蟲がねびゑるよ、ぢやお前さん全體幾何ねだるつもりなの」

「百兩出しねゑ」

ドカと其まゝ大胡座、されど此方のね違も去る者どクともせ

ず、冷やかに笑ふ眼中稻妻の光あり、

「權さん、お前も大分蟲が好いねゑ、百兩とは感心な切出し

さ、お氣の毒さまながら五兩さつては鑑一文も出ないよ、そ

んな素人威しの文句でおびゑるお迷さんぢやないのさ、見違

つちやア爲にならないよ、ホ、ホ、ホ、」

笑ふ毎に鬢の毛ゆらくと小助うつて、折々後れ毛のチラチ

ラと頬に亂れかゝる様、物凄さばかり艶なるに權太思はず見



憶れて、  
 「圖太の阿女だ、金は要らねぬ女房になれ惚れた」  
 さては此奴、いよく炙所へ切込んだり、

其十二

生來不敵の毒婦なれども未だやうく十六のお進、借はどけ  
 かり眉を顰めて途方に暮れしが、やがて徐に思案をめぐらす  
 やう、此奴思ひしよりは手をとれへあり、人間並の面は持すに大  
 所詮青二才欺す手では安々のるまじ、人殺しの疾所を押へて四の五の云  
 臆やこのお進を抱て寝んとはさりとては呆れた代物なり、た

どひ野の末河の瀬に骨を洒し瘦犬の餌食となればとて、千里  
 奥山から生禽つた様な化面男になんとして肌身ゆるさるべき  
 とはいへ、此奴も去る者、人殺しの疾所を押へて四の五の云  
 はさず際に冠掉らす考なれば一線二線の繩では中々以てか  
 るまじ、  
 面から嫌どかぶり掉らんか、此奴只では措くまじ、萬が一に  
 も現在の伯母と情夫を殺したはれ違といふ女で候ふと出る所  
 へ抱込み行かれては一も二もなし、  
 あゝ、箸にも抗にもかゝらぬ後々までの邪魔者寧そ一思ひに  
 息の根とめてやらむか、いや、膽こそ男一人前には徹塵も  
 劣らねど、力盡にては見るから荒くれたる大兵肥満の此奴に  
 何として易々勝たるべき、倘し斯うと知らば初手から此様な  
 曲者に大事は頼むまじきに、



うじ山の権太は色氣なしの大悪黨、人間の一人二人蹴殺すこと首筋の武を捨りつぶすほどにも思はぬ無双の曲者と聞いて好い相手と頼んだが一生の不覚、  
 此上は順から出て逆に捨るの外はなし、まゝよ一過二過貸せばどて減る東西ではなし、怖い夢見た覺悟で眼を眠つてやらんと、お運速に膝を進めて、花を欺く美顔ばツと赤め眼元に盗れむばかりの笑持たせ、  
 「権さん、お前も餘ッ程野暮だよ、何も是が路傍で行會ふた知らぬ顔ではなし、何うせ二人共人殺しの罪はのがれぬ同じ穴の狐さ、一切親類交際でさつくばらりて話せる人だらう、怖し文句の二つや三つでへロツク女ぢやないよ、其處は古い魚心ありや水さ、随分其方の出やうによりや、ね」

其十三

権太は相格をくづしてニヤ／＼と笑ひ、  
 「見そこなつた、かうれ運さん私ナが悪いから宥してくんな實は手、お前にどつこんといふ寸法で、何にも云はねエ」  
 「あれホ、ホ、ホ、」

稍ありて逆類に亂れかゝる黒髪夏蚬げにかきあげつゝ、  
 更ゆく蒲天の景氣見上げて何事か思案にくゝる体やがてニ  
 コリと笑ふて振返れば、今しも権太は剛き澁紙面に笑たゝね  
 へん色男には誰がなると云ひたげに舐より片手さし出し、流



の水を掬んで咽口を濡ふしぬ、  
「鳥渡権さん御覧な、そら彼處に、彼の山の松の枝に」

横太蹲踞ながら振仰ぎて、  
「何、ド、何處に、夜退星」

「其處だないよ、そら此方にさ、この指の見倒に」  
空を指さしながら彼方々々示すれ違につり込まれ、呢と見

遣りて餘念なき權太油断を見澄し、ね違ニタリと妻き笑を片

頬に浮べつゝ、異様の光を帯びたる腫を定めて權太が首筋き

ツと凝視め、素早く口に唾へし手拭巻付け力を極めてグイと

「あ、ッ、あ、ッ」  
両手を上げ空を掴みて悶々苦しむ權太が必死の様を冷やかに

見やり、尙も少しも手先の力をゆるめず、

「ホ、ホ、自業自得さ、親にも見せない大事の東西を、一通貸

しや成佛しても本望だらう、ホ、ホ、罰は目の前、勘忍おしよ

最後の力を極めてウンと締上ぐれば何條堪らむ、可哀や權太

グの音も得上げず、手足ビクくと動かせながら息絶ぬぬ、

「ねや、存外もろい奴さんだよ」  
不敵や其まゝ左右の手を放してホンと突やれば、さんぶと水

に辟して頬を舐る河風水の如し、  
折しも彼方の岸近へ現はれし大の人影、南無三と自ら掉をあ

やつりながら此方の岸へ船を寄せんとするお違、未だ背なが

ら死せるが如き満目の夜氣を破つて開ゆる大喝一聲、  
「曲者待てッ」

今しも雲を出でし八日の月明りを便りに、ヒラリと岸へ飛上

りしれ違、此時又一個人影此方の岸なる木の陰より現れ、



突なりお遊が帯際ムツと据わぬ、

「大膽不敵の女、動くな」

「あれ、何をッ」

「小癩な奴ぢや」

聲を共に矢筈にお遊を捻伏せんとす、されどお遊はこゝ懸命必死の瀬戸際と、満身の力を極めてエイと振放し、双手の力を極めて敵が胸元ドント押付け、透さす身を翻へして木の根を極めて敵が胸元ドント押付け、透さす身を翻へして木の根は松懸、開ゆるは水の音、

其十四

秋も早や残り少うなりぬ、木枯の聲はげしく、霜枯の梢に宿る木の葉は風のまに／＼散りて、埒に宿る鳥さへ更ゆく霜夜の寒氣に屢々羽叩して枝に止まらず、果は言合せたるが如く此方より一羽、彼方より二羽、と明るも待たず心細げに何處ともなく飛去り、空には水の如き片割の月物凄く、折々煙に似たる淡き村雲に包まれ、満目の景色を油繪の如く色彩りぬ時は丑三つ過ぎ、處は京の南、深草の里端れ、

只見る森々たる松の老樹の下に寄築ひたる五六の黒影あり、



風吹く毎にバツと四邊を照すは焚火と覺しく件の黑影ありありと照しぬ、  
 影は人にて、而も兩刀を帶したるは今日この頃洛中洛外を徘徊する武士の浪人ならじ、口々に何事をか罵りながら一人の武士を取圍みて、手を上げ足を蹴らすさま、何れ只とは見えず、  
 夜は愈々更けて四邊に聲なく、武士の浪人們が叫ぶ聲は手に取る如く聞ゆぬ、  
 「さあ何とて御坐る、井牟田氏、これは井牟田氏」  
 「左文治殿黙つて居られては相解らぬ」  
 さてこそ中なる武士は井牟田左文治と見ゆたれ、左文治は腕を組み頭を垂れたるまゝ、さらさら何の答もなし、  
 「身共等にのみ口叩かせてグの音も出されぬとは、むゝ其許

は耳を持たれぬと見ゆる、いや申開くべき口も」  
 「あッ此奴如き腹腐りし武士に問答無益で御坐る、エ、身共が刀の錆に」  
 一個の影は動きぬ、二三の影は兩手を上げ慌てゝ制しながら「待つた、待つた、今一應某等が申すことあれば、こりや左文治をこれへ直れ、事新しう云ふまでもなければ、我々同志の者は他までも其許を信じて、斯る大用まで容易に頼みしならずや、身共等が明なさは申しながら、易々其許に賣られ申した、其許身共等同士に何と誓言致されしぞ、  
 生て王家一統の天下を見る能はざれば死して忠義の鬼とならんと、そ、其舌の根さへ乾かぬうち、ナ、何事でムる、我々が江戸行の路金を遊蕩のためにッ」  
 左文治は垂れし頭をムクともたげ同じく聲低く、やゝ頭ひを



帯びて、

「全く遊蕩などは、是には深き仔細」

「悉く黙れ、黙れ、また小賢しき辨解立て、左程義に背かぬ其許ならば何故路金を失はれた本月末までには一同江戸に聚り豫ての手筈を實行致す約束、その今日となりて大切の路金がなきとは、費消せられたに相違ない、何なんど、申譯が御坐るか、此上は方々に佐幕黨と見られても一言ない等身共等同志を賣つたと云はれても」

「憤怒の聲は顔へて涙を交ぬ、」

「荷も大丈夫が、男兒が、大望を抱く武士が、僅ばかりの金銭のために節を變ずるとは、拙者はム、無念で、其許如き腐れ武士を同志と心得たが、さ、殘念で」

「キリ」と齒を鳴らし足踏しめて、

「見事、せ、切腹めされ、武士の情けにケ、檢分するッ」

「切腹、タ、誰にて御坐る、此奴をどき犬畜生には武士の作法無用々々やい、畜生ソ、其兩刀なんの爲に帶する、兩刀は武士の帶するものぞ、犬には無用ぢや」

「我々が交る、寸断しくる、はッ」

口々に叫びつゝ、足を上げて蹴るもの、拳を固めて横鬚の邊り撲るもの、入り亂れ立亂れ浪籍を極めぬ、求女は無念の齒をかみならしつゝ、必死の聲を上げて、

「此上は申譯せぬ、武運に盡きた左文治が、今ッ」

「聴きたらない、犬めッ」

「打て」

「斬れ」



何れも腰の一刀引抜かえとする折しも、

「あれ暫らく、其れ金の此處に」

絹を引裂くが如き聲もろとも、稻妻の如く身を投込みしものあり、

其十五

「何者」

「何者ぢやッ」

叫びながら一同陣を据ゑて見れば、夜目には一入物姿さばかり艶なる乙女なり、

「ホ、これは何方様も御揃ひ遊ばし、妾は遣と申すもの其處にれいで左文治様には一方ならぬ御恩を受けし、いや誠は非牟田左文治が宿の妾」

「なんとッ」

驚き叫ぶ左文治に構はず、れ遣は溢るゝばかりの笑を流し面に浮べて、ヅラりと一同を見渡し、

「いま彼處で聞きませれば、路金とやらを使ひ無くせしと井牟田様、いや良人をお叱りの様子、なれども、其れ金は女房の遣が預つて此處に、はい確に百兩、改めて御手渡し申しやする」

不敵や大膽や、吹けば飛ばん優しの姿もちながら、すらりと并んだる浪士等を兎の毛ほども恐れず、流るゝ如き辯舌さら淀まず、片手に百兩の金包を引掴みながら、お逆膝頭もて



大地を刻んでシリ、くど身を進めぬ、  
 井牟田左文治に妻あることは今が初耳なれど、見れば服装風  
 俗の何とやららん高尙く、言の節々に筋立ちて少しも亂れざる  
 未だやうく十六七の乙女の身もて、斯る夜陰に此邊と徘徊  
 して少しも怖れざるなど、天晴れ女に惜しき膽力、思へばな  
 つかし、什麼にも一癖見所あり、左文治が宿の妻と名乗りて  
 何處の何處へ出ても恥かしからぬ女なりけりと、さすに、  
 正直一圖武骨一逼の己が心にくらべて、浪士等は毒婦が三寸  
 の舌頭に捲込まれて只呆るゝのみ、  
 「左文治が宿の妻が確に金子御手渡し申しまする、さ、れ受  
 取り下され、このお金さへあれば左文治御成敗にも及びませ  
 ませ、それとも」  
 半ば云はせず浪士等は赫と怒りて、おのれ女め、よしや左文

ば ろ ば

治の妻なりとて小賢しき一言聞捨てならじ、國家の安危を双  
 肩に荷ふ志士の身でありながら、斯る女と契りを結ぶ井牟田  
 左文治愈々以て捨てたき難しと中なる一人ツカくと進み出  
 で、

ば

「こりや女、云はして置けば言語同断の無禮、何事も汝と  
 きものゝ知る處ならず左文治は仔細あつて身共等が天誅加不  
 る止めだて致さば爲にならぬぞ、疾く立去れ、るゝ再び申さ

ら

ば命ないぞッ」  
 威猛高に叱する浪士をジロリと見上げて、お違少しも身動き  
 だにせず、花を欺く美顔くづしてホ、と打笑みぬ、  
 「ホ、ホ、ホ、其やうな怖いれ顔をなされたとて、ホ、  
 井牟田左文治が妻で御坐ります、たどひお武家でも数なら  
 ぬ女でも道理に二つはない筈、左文治が首を斬つたとて皆様

ば



六十六  
のれ爲めになるでない、それよりは此れ金を持つて江戸とやらへ一時も早くお立ちなされるが何より、ね、爾うぢやありませんかホ、ホ、」  
早やそろく、と地金の本性露はし來りて言さへくづしかるさまに、浪士等は益々怒りて躍上りさま、  
「黙れ女ッ、其方までも身共等の秘密を知りしと覺ゆる、女なりとて今は、左文治もろども、ソレ方々」  
「罪ならぬ罪に服さぬ井牟田左文治が側き見よ、寄れやッ」  
月は何時しか雲に隠れて敵味方さへ定かならねど、電光石火と閃めく白刃の光を便りに互ひの切聲はげしく切掃ひぬ、折しも耳を破つて擡く鐵砲の音、續いて聞ゆる人聲、

「佐賀藩の浪士井牟田左文治を初め一同覺悟せい、幕府よりの間諜ぞ、首骨洗つて天誅裁けッ」  
さらに入亂れたる大刀音切々いよく凄まじ、

其十六

有明の日見る間に西の山の端に落ちぬ、東の空まだ白まねば四邊は朦朧として湖暗く、遙か向ふの人家より鳥の聲かすかに聞えて、野も山も見波す限り一面の霜を浴びて、颯と吹く風は針もて刺すが如し、  
曉の明星の光に足元すかしつゝ、屢々後邊を振り返りながら後に



なり先に成りヌタく、と小走り、女は男に  
追いつてシカと袂を捉ひ、煙の如く立昇る  
片手もて胸元撫下しながら、

「あゝ、あゝ、苦しい、昨夜から一生懸命になつたので、  
苦しい、胸がドキ」男は静かに振り返りて軽く頷きしのみ、  
言の辭も返さず、さも物思はしげにホッと太息を漏し  
ぬ、女は氣遣はしげに差覗きて、

「何うかなすつて、何とやら済ぬれ顔色、貴郎、お足が痛み  
ますか」

男は漸く重き口を開き、  
「いや氣遣ふに及ばぬ、それよりは汝は、さぞ慣れぬ夜道を  
走つて苦痛なからう、今少しぢや辛抱せよ」  
おとは又口を閉して思案の小首を傾けつゝ、愈々足を早めぬ、

女はなほも捉へし袂を放さず、海關ながら染々男を見上げて  
「貴郎ね腹も立ちませうが妾を哀れと思召して、何卒、道々  
も申しまする敢果ない身の上、双親はなし、あの邪檻な伯母  
にさへ振捨られて」

いひさして男の袂を顔に押當てサメく泣入るを、男は眉を  
寄せながら尻を見詰て、  
「また、泣くのか、何事も承知ぢや、淀から明日の晝前で兎  
も角も大阪へ下り、汝の身の振り方もつけやらむほどに、心  
丈夫に、ゑッ其様にメソく泣くものでないワ」

膝しつ懨めつ、此度は已が手を差伸べて女の手を曳きつゝ、更  
らに足を早めぬ、  
實にや小唄にうたふ秋の空の變り易く、雲一點もあらざりし  
大空俄に薄墨を流せし如く、西の方は黒味わたつて、愛宕山



の風さつと吹かば雨とやならむ、  
 「やあッ、時雨さうぢや、降らぬうちに急いだく」  
 男は空を見上げて女を勵ませせ、女は甚く疲れし態にて足の  
 運びもはか／＼しからず遙の行方を指さして、  
 「あれ彼處に火が、息が切れて、おゝ苦しい、暫らく休まね  
 ば、彼の燈火の處で」  
 男は思はず打笑ひて、なほも女を勵まし、  
 「む、人目にかゝらぬやうにと態と本街道をよけて野中を  
 走るなれば、嘸つかれつらう、さらば燈火の處まで急いだく  
 火影はたしかに朝起の農夫が野面に出づるまでの一仕事と見  
 しは空頼み、昨夜埋めし新佛へ手向けの提燈の火わづかに消  
 殘るなり、見れば墨々たる石碑算を亂して、小笹小草の茂り  
 たるさへ物憂く、あはれ此邊の農夫が幾多の悲嘆を苦熱す石

の下に包む野中の墓原なりけり、二人は思はず顔見合して言  
 なし、

其十七

並大抵の女なれば我知らず戰慄して男に絶付き、早くくと  
 此處立去らんとすべきなれど、さても此女只者ならじと見ぬ  
 て、兎の毛ほどの怖氣もなく、傍なる地藏堂を見返り、  
 「しばらく此處で、おゝ切なり」  
 空はます／＼暗く早やポツリ／＼、  
 「やッ雨、ちゑッいま／＼し」



「さあ貴郎、早く」  
 無性に袖をひきて勸むる女の言に従ひ、男は前後の思案なく  
 慌て、地藏堂へ飛込みぬ、外面は盆を覆す如く大地を叩いて  
 風さへいたく加りぬ、  
 這の男女何者、女は言の節々身のこなしにも一目に其れと知  
 らる、毒婦れ違にて、男は云はずと知れし非牟田左文治なり  
 さても左文治、斯る毒婦と手に手を取つてそもや何處へ往か  
 んとする、  
 左文治生れて清淨潔白心に一點の汚點をとゞめねど、れ違の  
 伯母に欺きとられし百兩の金より身に覺ぬなき嫌疑させられ  
 同志の者より犬畜生との罵詈譏誘うけ、無念の腸た廻して有  
 るにもあられず、人は死すべき時に死せざれば死に優る恥あ  
 りと早くも胸を定めて、

見よや我れ非牟田左文治、所詮武運拙き身の今更ら何をか悔  
 まひ、あはれ此腕の續かんかぎり貫釘の折んまで斬つて斬つ  
 て切死せんと、遽に暴れ廻る脱兎の勢ひおそろしく、あはや  
 大地を血糊に染めて落花浪蕪の哀れを散りにし跡に呟はれん  
 とせしに、  
 忽ち響く鐵砲の音もろとも、喚き叫んで切込んだる幕府の間  
 謀が鋭き刀尖に、左文治に構はず敵味方入乱れて火花を散ら  
 して必死と戦ふ一同を見ては、流石にすても措かれず、再び  
 一刀取直して亂刃の下へ飛込まんせしを、  
 お進満身の力を極めて引込めさま、涙の聲ふり絞り口説きつ  
 喚きつ袂に縋り、妾を哀れと思召さば此處暫し身を避けて下  
 され、いふべきことは山あり海あり、  
 たとひ貴郎様いばかり僅き玉へばとて、味方にあらぬ味方



を助けて跡は再び御身の大事、此處の道理を聞分けてど、  
 命必死と止むる哀れにひかされ、宛がら夢路を辿るが如く其  
 場を走りて、來るどもなしに此處まで來りたるなり、  
 さりとては奇怪なり、若き男女が人なき闇夜の辻堂に燈火もな  
 く只二人、而もはけしき雨風の音に語る聲さへ聞えず、戸の  
 隙間をもれてヒユヒユと吹込む風は濕氣を帯て肌寒く、思はず  
 寄添ふ二人がさま只ならじ、  
 見れば、道は井牟田左文治なり、膝もくづさず容姿も亂さず  
 両手を正しく己が膝におきて無言のまゝ戶外を見詰め、  
 「お、寒い、寒い、貴郎寒くは」  
 お達は主に摺寄り、手早く己が上衣を脱捨てフワリと主が背  
 より着せかけし心の中は何處、左文治あはて、拂退け、  
 「無用々々、少しも寒うはない」

雨はいよ／＼降しきりて風ますます荒く、其處の森、此處の  
 林に木の枝の幾個どく、折るゝ音さへ物凄く聞ゆる、  
 地蔵堂の中には暫し聲あざりしが、お達をもなんとかしか  
 けむ、怒りを帯びたる左文治が聲高く、  
 「ゑッ無禮ぞ、男女七才にして席を同うせずとの本文さへあ  
 るに」

其十八

こゝ大阪道頓堀の旅籠屋、舁屋の奥座敷二室借りて逗留する  
 男女あり、物とし風俗にても男は勤王浪士井牟田左文治、女



は毒婦のお遊と知られぬ、  
 辻堂の雨宿りに左文治あはやお遊が手の中に丸められむとせ  
 しも、流石は鍊ひくし心たしかに、其場はなんの事なく清  
 浄潔白にて淀より三十石に乗込み、この外屋へ宿りてよりも  
 左文治夜はお遊と襖を同らせず、口に半句の戯れもいはず、  
 身に半點の疵も亂さねば、お遊いまは手のつけどころもな  
 く、汀に遊ぶ鶯の雄に離れし心地、毒悪無惨の女も眞から  
 底から思ひに亂れ、笑止や襟に手を差入れこの溜息吐息、  
 或夜、左文治身は床の上に横へたれど、過越方あるは行末の  
 ことなを思ひつゞけていも眠られず、早や夜半の鐘も聞終り  
 しと思ふ頃、不思議や、次の室なるお遊が臥したる方よりヨ  
 ヨと泣く音の洩れけり、  
 左文治譏しさに堪へず、密と襖の隙より差覗けば、南無三寶

お遊は今しも消ぬかゝる行燈に身を背向け、一挺の刺刀もて  
 我ど我が咽口を突立んとする利那なれば、左文治物をも云は  
 ず突然襖隙開き飛入りさま、  
 「まで、エ、待て」

「あれ、おゆるし、コ、殺して」

「白痴を申すな、譯を云へ譯を、死する程の理由があらう、

云へ、エ、危ない」

「いひぬ、その譯は何うあつても今は、この懐中に書置が、  
 あとから御覽遊ばされて」

「ナニ書置が」

叫びながら、一際力を極めて刀物を奪取り、手早くお遊が懐  
 中へ手を差入れて引出す一通、  
 「やゝいゝ其れ見られては」



「退けやッ」  
撞と突倒しさま、行燈の光に照して讀下せば、

あの世の向ひの急ぎ候て心せわしく候ふまゝわらく御心掛け  
し、左候へば此程より思ひもよらすいるく御心掛け  
下され何と御禮の申やうもおわさす候、かゝる数々の御情  
けを受けながら我儘に世を早め候ば真にく罪深くは候へ  
ども私事此世に永らふるも心に思ふ萬分の一も叶はず、  
に味氣なく存候まゝ惜からぬ命を締め候ふ申すも最後の細  
言に似てれ耻かしうは候へども思へば私ほ世に悲しく幸  
く生れ來りしものなく候、邪檻なる伯母に勘められ人もあら  
うに赤弱風情に枕交さねばならぬしごとなり如何にも口惜  
しく残念に存候まゝ覺悟を極めて池の藻屑とならんとせし  
を貴郎様に助けられおめく生永らへ候へども又もや様々

の難義に出會ひ死なんとせしは數へもならず候さりながら  
如何なる因果や貴郎様を一目見まゐらせ候ふてより御姿の  
露忘られず御慕しさは日に益しまさりゆきておはれ今生に  
只一目と神に願ひ佛に祈りし甲斐ありて日比の本望叶ひ、  
彼の夜御目にかゝりしのみか、思はぬ事の幸いとなりて手  
に手を取つて夜路を走り候こと身に染々と嬉しく戀慕の  
情はいよつたりて堪られず、女のだしなみさへも忘れ  
て辻堂の雨宿りにあつかましも打つけにお怨み申上げ候  
も貴郎様には男女七歳にして席を同らせすとやら厳しく御  
叱り遊ばし候へども斯まで深く思ひつめ候ことお忘れ  
さよしもなく夜毎の枕紙を涙にしめし候こと、敢果なき辛  
き御推もふじ被下度、大阪へ下りて此升屋に宿り候より早  
や十二三日は夢と經ち候へども夜は袂を隔て夢の通ひ路さ



へゆるされず、屢々眼にはせ舉動に露はし候へども唯一  
言の嬉しき御言とても下されず便りなき私を御慰み下さる  
のみにて一日も早く身の振方をつけやらんと其れのみ御申  
しつゝけなされ浮たる事とは塵ほどもなき恨めしさ、そ  
れはお國許には大事のく千代かけて御契り遊ばし候ふ奥  
様もねんいでまし遊はし候はんかなれど、私切なき胸の  
うち少しは御察し下されても弓矢八幡もよも御罰はあて玉  
はじと存候早や此上はかゝる頼み少き浮世に望みたねて候  
へば朝夕此側に侍さまらせ迷ひの雲に苦しめられんより  
は黄泉とやらへ参りせめては今生の罪はるぼし致度、今宵  
相果て申候、亡き跡にて露ばどにても哀れと思召し下され  
候へば御口づから一偏の御回向くだされ度名僧智識が千部  
萬部の御經より嬉しく成佛致候幾度くりかへし候も返らぬ

事と悲しく惜しき筆どめ、折から寒さに向ひ候へば千  
金の御身御大切ににおんいとひなさるべく呉々もねんじあげ  
芽出度かしく

蓮より

左文治様

設下す左文治が手は次第く、願へて、兩眼には只ならぬ露  
を浮めぬ、弄をいッと上眼に見やりしお蓮、仕済したりと思  
ふ心を色にも出さず、雙の袂を顔に押當て呼吸さへ苦しげに  
咽入りくぬ、  
山鳥の尾の長々しく書つらねし文の文句は前後に亂れて、薄  
墨の筆の運びにちり處々に涙に濡れし痕あるさへ一入の哀れ  
と、さすがに剛氣の左文治も胸せまりて咽元苦しく、力なげ  
に文投出しさま頭を垂れて無言、お蓮こゝぞと身を摺寄せ涙



の聲紋り  
「お察しなされて、せめて、貴郎のお手づから、コ、殺して  
下され」  
再びわつと聲高く泣叫ぶを、左文治他個に聞かれじと片手を  
あげて制しながら  
「静かに、過分に思ふぞ、と、これ程までに身元を、ゆるせ  
有してくりや、ゑッ吃と女房にする、フ、武士道捨てた」  
又もやヨ、と泣くた運が聲、それさへ果はしづまりて、庭の  
小徑を動かしてサラ／＼と鳴る風の音寒し、

其十九

夜更け人定りて天地に音なき頃、枕を退けてムクと起上りし  
井牟田左文治、  
見れば不思議や兩眼涙に濡れて唇嚙しめ、拳を固め己が胸を  
打ちて、無念、ゑ、無念、我ながら腐り果てたり、思へば國  
を憂ひ時を慨みて、遙々故里を後にせしより茲に六年、雨に  
浴し風に櫛けづり幾千萬の艱苦を忍び堪へしは甚だなんのた  
めぞ、御國のため天下蒼生のために盡さんとせし衷心も今は  
空となりぬ、あゝ口惜しや残念や斯る女只一人のため井牟田



左文治は情愛の奴となりて功なく名なく此身此儘に終らんか  
 斯る不忠不孝を國元なる父上の知り給は、甚麼、  
 嗚や無念の齒を噛鳴して老の兩眼に涙を浮べ、おのれ犬畜生  
 にも劣りし人非人めと手を震はし膝を動かさし、煙管の厂首も  
 碎けよと灰吹叩いて憤り玉ふ御姿はあり、眼に映りぬ、  
 老先短き御身の若や是より疾付き玉ひはせぬか、否、斯まで  
 腸腐りし子と知り玉はず、我子は什麼、若し旅寢の枕に病仆  
 れはせぬか、他國の浪士が白刀に斬られとせぬか、あはれ先  
 祖代々の御靈骨が身を守護させ玉へと、朝夕の持佛に祈念を  
 凝し玉ふと思へば、勿體なし、あ、勿體なし、る、何として  
 我は斯まで腐れしぞ、  
 左文治も武士なり、断然断ちがたき愛情の綱を断切りて、お  
 ゝそれよ可憐なれど此女を置去りに今宵の中に此處を逃去ら

んか、いや、いや、いや、我逃去りし跡は可哀やあの可愛  
 らしい眼を涙に澄腫らしていかに狂ひやせぬ、日比から心小  
 さく二つ目には死といふ一時を投出すお選、我に振捨られて  
 何として生永らふべき、必ず死なむ、あ、死なむ、  
 それを知りつゝ、唯一言の別辭も告げずに鬼ならぬ身のなんと  
 して出行かるべき、あ、此身は一つ、心は二つ、る、何とせ  
 んど霞の如き涙ぼろく、と滾して、屹と天井を睨み上げぬ、  
 同じ臥床に枕並べて他愛もなくスヤ／＼と眠るお選が寝顔に  
 左文治呢と眸をくれて稍しばし氣抜けの如くなりしが、氣を  
 取直して染々見れば、ばつと櫻色を顔に懸亂れ髪四五本  
 かゝりしさま、繪にもか、れず、  
 左文治思はず身を慄はせしが、あら不思議や、花の顔しだい  
 く、に皺を生じて、柳の眉は見る／＼太く、長く果と半ば白



髪を交わて、こゝぞ命の兩眼俄におそろしく光りぬ、  
 それはお蓮にあらで何時のほどにや父の顔となりて、ハタと  
 此方を睨みぬ、  
 はッど驚き怖れて兩眼を閉づれば、怨むが如く泣くが如きお  
 蓮の顔、再び眼を開けば此度は十年前に別れし亡き母の顔と  
 なりてサメ〜と泣きぬ、さすがの左文治脇の下より滴る冷  
 汗拭ひもぬせず、其ま、身を横へてスボリと夜着引被ければ、  
 忽ち耳元に數萬の人の聲がや〜と聞えて、山現れ、海生じ  
 森林、宮殿、小川、などあり〜と見えて、馬に乗りたる大  
 將、數萬の軍兵、旗差物、弓鐵砲、大砲なんど一面に照れ、  
 見る〜兩軍入亂れて切りつ切られつ、鳴響く大筒小筒の音  
 は電雷の轟くが如く、流る、血汐と川に似て、次第〜に已  
 が枕元近く流れ来りぬ、

れ蓮が寝反りうちしにハッど我にかへれば、我は矢張りお蓮  
 と共に臥して更らに異ることなし、左文治さらに無念の涙を  
 ハッハッど溢し、いかなれば斯までも心の乱れしぞと、思は  
 す胸を掻搔つて夜着の襟かみ破りぬ、  
 かくとも知らず、お蓮は半ば枕をはづして半身を布団の外へ  
 のり出し、什麼なる夢や見るらむ口のうちにツブ〜と吐  
 く他愛なさ、左文治再び煩惱の心狂ひ、瞬きもせず暫し見詰  
 めぬしが、やがてお蓮が肩の邊りへ夜着引被けながら、  
 「エ、風をひくにこれさ」



世に男女互ひの間の愛といふものは怪しきものはあるまじ  
拔山蓋世の豪傑も己が愛する美人の前に半點の策もなく  
一たび起たば風雲を叱咤する偉人も、最惜しの美人に身を撫  
でられながら眼を細く首を縮めたるさまは二束三文の價値も  
なし、實に花の下に猛者なしとは格言たりけり、されば浮川  
竹の淵に子がひより生長ち、あらん限りの苦勞辛勞に酸さも  
甘さも知、抜き、夜毎に異なる散多の客を手鞠にとつて弄ぶほど  
の遊女も、眞實神から愛情を運ぶ戀には手もなく足もなく、

處女にも劣る他愛なさにさんぐ愛身をやつすとかや、  
容姿は花の如く精神は針の如きお蓮も、五體の血汐人並にか  
よへば、非惡の性根魂あくまで鏡さだけ愛情の道には何處ま  
でも拗念深く、一度左文治を見しよりキリ、としたる男振り  
にフと心迷ひ、あはれ女と生れたるからは斯る男と契を結  
び、思ひ思はれ愛し愛され、明の鳥の啼音をうらみて飽くは  
を樂みたしと、初めは叔母と情夫に勸められて欺す氣でかゝ  
りしも、情夫が浮海叔母が邪檻に左文治を思ふ情いよくつ  
のり、叔母と情夫に衣服盛りし後天地の廣き離憚るものも  
なく、心にありさりの智慧を絞り洛中洛外と探ね廻りて終に  
左文治が在所を知り、借この上は腕次第と逢ふべき首尾に心  
を碎けと素より相手が相手なれば好き思案も出でず、千々に  
胸を痛めしに惡運つよき身は何事も己が思ふまゝにて、左文



治百兩の金のために同志の者より疑はれて屢々詰問せられ、  
 なは今宵も深草の里にて一同より金のありかを責問はる、と  
 のこと、符々知り、時期こそ來れと豫て用意の金を懐中に  
 不敵や未だやうく十七の乙女の身もて夜路の單身れそるし  
 とも思はず、戀には心も深草なる路傍の松の小蔭に待ちくら  
 して、終に思ふ存分左文治を欺き、手に手を取つて其場を逃  
 ぐるまでは艘付けしも、左文治が鐵鵬鏢かすべくもあらず、  
 怨めど口説けど左文治知らざるもの、如く、所詮並大抵の手  
 管にては應と云はすることもならず、恋は氣永きものと  
 いへば、たとひ一年二年かればとて此戀成就するまでも石  
 にかちりついても片時傍は離れまじと、宛がら蛙を狙ふ蛇の  
 如く、手を替ぬ品を替ぬたる未やうく思ひを遂げてより  
 はせやら可愛の男甚麼なんどしてくれむ、

此上は命も何も要つたものかはとお進ボンと身を投出して現  
 他愛もなく、泣つ笑ひつ怨みつ啣ちつ、未だ初戀の男を朝と  
 なく晩となくコッキ廻して骨も肉も鑢けんばかりに嬉しがる  
 風情、一夜のうちには難なく三人までも引導渡せし物凄き腕前  
 肝玉も、笑止や左文治が前では蛭に塩く、

其二十一

あしがちる浪花の北、萩の名所や三番村の片邊り、天から降  
 りしか地から湧きしか、この頃新に建てられし小家あり、誰  
 が風流の好にや竹の柱小笹の屋根目新しく、萩の袖垣小粹に



結廻らし、緋張の掛行燈に、酒肴いろく、と包めど主人が  
 さまもそれと忍ばれて床しげなる唐様の筆の跡あさやかに、  
 路ゆく人を呼とめて愛嬌を賣る美人ありけり、  
 開店してより未だ間はなけれど、廣き大坂の町々はいふもさ  
 らなり、遠き池田伊丹邊りへまでも評判高く、料理の善悪は  
 二段として生辨天儀が優しき酌に習しの酔を買むと、彼方此  
 方より態々高根の花を折にくる好色の客ひきもきらず、  
 長き春の日脚も漸く西に傾き、黄昏つぐる鐘の音ぼんど鳴り  
 て、大空は東の方より次第々々に黒みゆき、己が家居へ急ぐ  
 百姓の野面歌かすかに、そよくと緩く吹く風におくらるゝ  
 菜種の花の薫ふんと匂ひて、友におくれし野雀一羽わはてゝ  
 軒を横切りぬ、  
 折しも十三の方より一挺の駕をつらせて自分ほソロソロ歩み

ながら微笑を含んで入来る三十前後の人品よき男あり、本場  
 結城の縮入の裾より折々古渡り砂羅紗の下着を蹴出し、紺博  
 多の帯固くひきしめ、赤銅造りの脇差落し差して柄に手拭を  
 結びつけしさま、何れ船場邊りなる大家の旦那衆と見えて、  
 言の節さへ何處となく町人には上品なり、  
 「はい御免なされ」  
 徐に床几に腰を下せば、聲聞きつけて奥の方より馳来りしは  
 美人の噂高き此家の主人なり、  
 今しも點せし燈火の火影に一際照添ふ花の笑顔に、さらに一  
 段の愛嬌を添して雪の兩手を揉みながら、  
 「おゝ何方かと思つたら、ホ、お珍らしい事ね、土佐堀の  
 旦那、ほんに貴郎は實がありませんよ、どうせ妾の宅は忘れ  
 てね仕舞ひなさるも無理はないんですが、ホ、ホ、何處か



に好いた樂みが出来ましたかホ、ホ、ホ、  
 男は軽く額を撫で、  
 「や、さう油をとられては一言なら、あゝ疲れたく、今日  
 は久々に伊丹の得意先まで出かけたが、いや最うがつくりし  
 た、其處で鳥渡美人のお顔を拜し奉つて一杯熱いやつを、な  
 んど實があらう」  
 「ホ、ホ、ホ、美人なんて、御馳走はお相憎でいますよ、貴  
 郎其處はあんまり、さあ奥へおらつしやいな、ホ、ホ、ホ、相異  
 らず手狭で、おゝ駕屋さん、今直ぐ熱いのをつけますから、  
 此方へれ這入りナチ」  
 さすがは音に聞えし評判者として、客をそらさぬ世辭愛嬌す厘  
 の扱目もなし、おゝ其親切難有けれど、熱燗で一杯よりはれ  
 主の味笑渦の汗ならば一杯吸ふて見たしと、駕昇其は聞えよ

がしに眩きながらカラクと笑ひぬ。

其二十二

奥の間には主人の美人と差向ひの男、早や酔微の眼元せんよ  
 りとして、  
 「いやお遊さん、暫らく見ぬ間にお前は愈々美しくなるやう  
 だ」  
 「あら嫌ですよ、冷評てさ、だがねエ貴郎、嘘にもそんな癖  
 しがらせを仰しやつては罪でムいませよ」  
 いひつゝ斜に男を見やりてホ、と笑ふ美しさ、男は眼を細く



しながら片手に猪口さし出して、

「今一杯ついで下され、あゝ好い搦梅に酔ひました、はゝは

主人の美人は軽く頭を下げて、

「二つれ藏きは出来ませうまいか、鳥渡お合を致しませう」

「む、是は失念、れ前の醫に見惚てツイ、はゝはゝはゝ、い

や時に私はふらく、歩いて歸りますゆゑ駕屋を歸して下され

「はい、今しがた駕屋さんには旦那は遅くお成りだからとい

つて、先へ、だから嗣を据ゑて御ゆつりなさいましな」

「や、そいつは大手廻しだ」

漸次に重る猪口の酔心地よく、紅を流せし如き男の顔を主人

の美人は染々見詰めつゝ、片手に壺を抑へ、片手に扇徳利を

差出して、

「さ、ね重ねませいな、はゝゝゝ、あれ溢れますよ」

「いや大丈夫、はゝはゝゝ、大丈夫だよ、あゝ心持が何ともい

へぬ、お遊さんのれ酌かと思へば一入はゝはゝゝゝ」

「ね、お遊さんや困りますよ、なんぼお世辭を仰しやつて 御馳

走は最う是れッ切りでいませすホゝゝゝ」

美人は男の我に充分心あるを見てとり、半ば膝をくづしてシ

リ、と男の側近くにじり寄り、溢るゝばかりの愛嬌を眼元

に持せて、

「お宅では定めし美しい方がお酌を成るんでせうが、たまに

は妾のやうなお多福にさせるも薬になりませすぞ、ホゝゝゝ」

「年頃といひ縹緞といひ、おまけに其口先では鬼に鐵棒、隨

分澤山な男も殺したらうが、あゝ及ばぬ戀、だめだゝゝ、定

めて好い御亭主がありませう、あゝ羨ましい事ぢや」



他ど吃く男を、美人の怨めしげにシロリと睨みて速に差俯き  
くませる如き雪の襟首こゝ見よがしに益々頭を垂れぬ、

「や、れ氣に觸つたか子」

美人は打萎れたる聲細く、

「そのやうな亭主があれば、恁麼營業をして人様の御機嫌な  
んか取らなくツても、ですが、れ見かけ通り誰一人り便りに

なるものは」

男は膝立直して摺寄り、

「むゝ本統か、ゑ、本統、便りになるものがあれば世話にな  
る氣か」

「はら」

「むゝそんなら私が世話せう、さあ」

「あれ貴郎、あれ、ホ、およし成されッてば、あれ」

端途に隔の袂さらりと開きてぬツと入来りし武士一人、美人  
は一目見るより慌て、飛退きさま逃んどするを、武士は透さ  
ず引捉ゐて撞と投出しぬ、  
「ゑゝこゝな不貞女め、姦通の成敗は男女共斬捨てぢや、ソ  
ン其れへ直れッ」

其二十三

驚き飛退く間もあらせず、怒りの聲鋭く突なり主人の美人を  
取つて抑へし左文治がさま什麼と見れば、顔色あくまで白く  
五分はどのびし月代黒漆の如く、眼中何處となく凄味を帯び



荒き黄八丈の綿入れに白縮緬の兵児帯ゆるく巻付け、太身の長刀をドンと落とし差したる服装は歌舞伎の小野定九郎を其ま燈火に映してキラ／＼光る兩眼を据へ、左の親指にて刀の鯉口切りながら、右の手先もて美人が首筋ムツと抑へ、身を縮めて震ひゐる男を睨み付けて、

「うぬ不届者めがッ、亭主の不在を幸ひに密夫を引入るゝどは、言語同断、兩人共ッ、其れへ直れッ」

力を極めて美人を突遣りさま、今しも面色青ざめてガタ／＼震ひながら兩手を合す男を、片足あげてエイと蹴仆し、

「武士の面上へ見事泥をぬるほどの男、豫て覺悟であらう、徐かに念佛いへ」

男は生たる心地もなく、頭を盤に摺付け聲戦々かせながら、

「ケ、決して左様の、たゞ酒を、サ、酒を、命ばかり」

「あッならぬ、サ手前は何處の何者だ、名を云へ、こら名乗らぬか、人の女房を寝取るほどの甲斐住男には些と相應せぬ臆病な其さま、へ、好い跡は悪いものぢやワ、ふッ」

男はいよく、總身を慄はせ齒の根も合はず、

「ま、ま、真に、ね、奥様も存じませず、しかし、決して、怪しい事は、若し奥様、貴女よりも旦那に、タ、頼みます、する」

「あッ黙れッ」

又も拳を上げて打んとするに、美人は慌て、涙の顔ふり上げ「あれ暫らく、あゝ、前さん短氣な、この旦那は何にも御存じのないこと、實は妾が旦那に岡惚してツイ、はい妾を成敗して下さいまし」



ひ、好い覺悟だ、しかし、男も助けはおかぬ、覺悟せいッ  
 情け用捨もなく美人の黒髪ムツと掴みて引寄せさま、身の毛  
 も戦慄む大業物ズラリと引抜き、すいと男が鼻先へ突付けぬ

其二十四

「當家の番頭は其方であるか、ひ、少々金子の入用あれば  
 立て貰ひたい」  
 れば、顔色あくまで白く前額の五分月代黒漆の如く、眼中な  
 んどなく凄味を帯て、荒き格子縞の黄八丈の綿入に白縮緬の  
 大綱笠を脱捨てぬッと入來る武士を見

兵子帯ゆるく巻つけ、太身の太刀物と落差したる物ど  
 し風俗、歌舞伎の小野定九郎を其まゝ、店頭に腰うちかけて  
 シロく、と家内を見廻しぬ、  
 額際より頭の頂上までピカピカと禿上りたる四十男、それと  
 見るより眼合の手を止めて怖るゝ進出て、揉手しながらへ  
 コくと頭を下げぬ、

「へい番頭は手前で、へい夫は實に、何れ様から、これ小僧  
 お茶を差上げい、序に御擧も」  
 「あいや構はれな、入用の金子は聊かなれど、過急に」  
 静に表の方を顧み、  
 「こりや、其品物これへ持てら」  
 群に應じて若燕めきたる二人の男額を汗にぬらしながら重げ  
 に一握の大長持を指込みぬ、



武士は軽く頷きて、  
 「大儀、先へ歸つてよいぞ」  
 番頭はあつと呆れて眼を丸めぬ、武士は其顔じろく、  
 「質屋と申すものは低當とやら申すものなければ金子用立ぬ  
 と承るが、乃ちその抵當ぢや」  
 番頭はしつと長持を見詰て、さても此中の品物、何れ緋子の  
 夜着に綾の襦、乃至軍用の鎧直衣弓鉞砲か、さりとは斯る日  
 中に大長持恥かしとも思はず撥込む無頓着さ、あゝまゝよ安  
 直く踏伏しくれむと、俄にニヤ／＼と笑ひて、  
 「へい、へい、中は未だ拜見しませぬが、自昧如何は御入  
 用で、勿論品物によりましては、へい、如何はとでも差上  
 するが、當今は眞に不景氣で質物の價もだん／＼、へい、  
 先づ如何程、自然大金の御用なれば手前共から他方へも、何

分當今は  
 「いや僅かばかりぢや、二千兩だけ借たい」  
 「へつ二千兩、ニ、二千、さては」  
 「何ッ」  
 素より中なる品物見ぬうちには値は四めねを高が長持一揃、二  
 百三百といへば成程とも思はむが、大枚二千兩の云係り、倍  
 は此奴この頃流行る浪人の謎りなりと番頭額に青筋たて、  
 「成程、折角では御座りませぬぞ、手前共は、へい、御断り  
 申しませぬ」  
 武士は眼をいからして、さも眞面目に  
 「なに断る、むいでもあたらなれど、是非とも二千兩入用で  
 御座る」  
 番頭は俄かに笑ひだし、



「およし成れませ、御冗談も事に依りまする、手前共は眞ッ  
 平御免を蒙ります、へい」  
 いひつゝ、早や去がしに空嘯けば、武士は少しく聲高く、  
 「いよ／＼貸ぬと申すか」  
 「へい、御相談には成りませぬ、せゝ、全牀此處を何處と思  
 て」  
 「名ゝ白痴め、質屋と知らず質おきにくる者わらうや、いや  
 ナ、大阪の街に指折の大金持、土佐堀の大國屋と知つて参つ  
 た、當家の身代にて二千兩は未だ安價い、なれども、それで  
 免す、長持受取れ」

番頭はヒツと武士の顔を見詰て冷かに打笑ひ、瘦ても枯ても  
 大國屋の大番頭、ゆすり語りを恐れて此せち辛き時節に質屋  
 がならうやと、さすがは大家を預る白鼠とてビクともせず、  
 愈々落着拂ふて、  
 「これお武士、大きな聲をせずには静かにして下さい、成程代  
 物次第では二千兩は愚か、一萬二萬でも用立ませうが、へい  
 其長持は些と、眞平で御座います」  
 武士はキリ／＼と肩をつり上げ膝揃寄せて、

其二十五



「いよく相成らぬと申すか、ひよ可憐や其方は老衰たナ、  
 當家の女房を呼べ、云聽する事がある」  
 「いや手前共には立派な主人がおります、女を出すには及び  
 ませぬ、とい懼りながら其爲の番頭も此處に」  
 武士は苦笑して願の髯を撫でながら、  
 「あまり大きな口を叩くまい、主人は昨日家出したまゝであ  
 らう、いや不在の筈ぢや」  
 はッと顔色變ゆる番頭を武士は淋しげに見やりて、  
 「いやサ、其方は主人の首と二千兩の端金いづれが大抵であ  
 る、其方の主人の首を質に二千兩安いでないか、拙者は北野  
 の先なる三番村に住する井牟田左文治と申す浪人ぞ、さ、斯  
 う名乗る上は只は歸らぬぞよ、此面の立つやうしてくれい、  
 何らぢや番頭」

俄に膝をくづして挫と大安坐、懐中より煙草入とり出してハ  
 バくと煙を吹く面つき一癖見えて薄氣味悪し、  
 番頭は笑をつくりて、初めの威勢にも似ず聲細く、  
 「兎も角も長持の中を、へい、其上如何様にも」  
 「む、代物の鑑定あやまるな、後に四の五の云は、長持擔  
 ぎ歸るまでのこと、眼の玉洗ふて見ろ」  
 開及六浦島が玉手箱ならねど、中には何れ深き仔細ぞあらむ  
 大長持、そつと蓋を開きて恐るゝ覗込みし番頭忠助、さッ  
 と顔色を變じて手早く閉し、手足ガタくと慄はせながら額  
 ともいはず首筋ともいはず、聯珠の如き汗をタラくと流し  
 ぬ、左文治シロリと横目に見やりて、煙管の吸売をボンと叩  
 き、  
 「番頭ッ、肝が潰れたか、エ、二千兩は安直はずぢや」



其まゝ空嘯いてセ、ラ笑ひぬ、

厚

其二十六

何事かは知らねと餘りに表の騒しさに奥より立出し當家の内儀、障子の隙よりソツト店の方差覗けば、今しも番頭の大長持の蓋に片手をかけて、慾深き鳩が豆鐵砲を喰ひし如く眼の玉を白黒させながら思案に暮る体、左文治が大胡坐の勢ものものしく四方を睨廻す風情、南無三さては只事ならじ、折々聞ゆる主人く、どの群に内儀は胸を躍らせ、若や良人が身に振係る大事にもやと立ても居ても堪らず、思はず障子打開き

ば

て駈出しぬ、はツと思へも今更ら引込むもなんとやら、是非なく左文治が前に両手をつかへて、怖さ耻かしさに火焔の如く顔を赤めながら、流石に大家に育ちし言しとやかに、「これは初の御目にかゝります、私は當家の女房にて、奉公人の不都合は主人の不行届に御座りますれば、番頭手代もが若し不都合いたしましたるなれば、何卒御宥しのはせを留守中の主人に替りまして、妾より御能申しませす」  
「其方が當家の内儀か、む、」  
左文治は懐中より小さき白紙包を取出して仔細らしく差出しぬ「これを、是をお主に進せる、いや只は進せぬぢや、長持と共に二千兩に預つて貰いたす」  
内儀は屢々躊躇しが、左文治に急立ちられて恐るゝ開き見れば、あらいまはしや、中は時ならぬ韓紅、見るさへ薄氣味悪



女おんなのこ指ゆび、  
 驚おどろきお呆ぼろる、内儀うちぎの顔かほを、左ひだり文治ぶんぢは穴あなのあくはせ見詰みづて、  
 「肝かんがつぶれたらう、それはね主ぬしの亭主ていしゆが可愛めづしい女おんなに斬きらせ  
 た、ちや、指ゆびまで斬きてやるほどの心中こころ女おんなは、即すなはち此こゝ井い牟む田でん左さ  
 文治ぶんぢが二世にせかけし女おんな房ぼうであるぞ、左ひだり様さまに面色おんしよくを變かるに及およばぬ  
 現在の亭主ていしゆが仇かたきし女おんなに指ゆびまで斬きせたとあつては餘あまり悲かなしく  
 も思おもふまい、いやサ女おんな房ぼうを奪さらられし左ひだり文治ぶんぢを何なにとしてくる、  
 こりや返答こたへせぬかッ」  
 漸おだ次に頭かぶを垂たれて一言半句いちごんはんくうの答こたもなき内儀うちぎの胸むねの苦くるしさは什じ  
 麼な番頭ばんとう手代てだいは生なたる心地こころもなく互たがひに顔かほ見合みあせて呆然ぼうぜんたるを  
 左ひだり文治ぶんぢはハタと睨にらみてツイと起たち上あり、  
 「武士ぶしの面おもてへ泥どろをぬつた當家たうけの主人しゆじんさ、主人しゆじんの命いのち二千兩にせんりやうで  
 買取かひとるか、たゞし、長持ながぢの中なかなる主ぬしを引摺ひきずり出して只ただ今いま眼まなこ前まへ

ば ら 派

で斬殺きんせつさうや、ゑッ二つ一つぢや、きりく返答こたへせいッ」

兩りやう脛しん踏ふ張はりり聲こゑ高たか々と喚わきたてぬ、

折ししも長持ながぢの蓋かぶ自然じぜんと持もち上あるよと見れば、

「御免ごめんなさいよ、今日けふから此家こゝの女房おんなぼうに成なりますのサ」

黄わうなる聲こゑふり絞しぼりつゝ、長持ながぢの蓋かぶガフと跳は上あげて顯出あはれし毒婦どくぶお

逆さか、是こゝはと驚おどろろく一同いどうには目めもくれず、ツカくと進すすみて、

「御免ごめんなさいまし、ね前まへさんが此家こゝの奥様おくさまですかねエ、妾めかけは

逆さかと申まをして此家こゝの旦那様だんなさまにはそれは、一方いっぽうならぬ御最負ごさいふに

あづかりましたもの、以來いらいはた見知り下くださいまし、はい、今いま

から此家こゝの女房おんなぼうで御座ございますよ、おい小僧こぞうさんお茶ちやをたくれ

ナ」

ば ら 派



其二十七

花の如き容姿にも似ぬ毒々しき舌を振ひて、片頬に冷かなる  
 笑を浮べつ、片膝立てながら左文治が煙草入とりあげプーと  
 煙を輪に吹きぬ、餘りのことに内儀は口惜しく腹立たしく、  
 きつと膝を進めて聲願はし、  
 「エ、お前は何の因縁があつて厚顔しい、人の家に女房二人  
 はいりませぬ、當家の女房は、妾です、はい、立派な女房で  
 す」

紙 ら ば

いひさして思はず鼻うちつまらせ襟袵の袖口もてソツと眼を  
 拭ひぬ、お蓮はセ、ラ笑ひながら、小指を切斷りたる右の手  
 を突出して、

「妾が女房といふ何よりの証據は、さ、見て下さいね、夫婦  
 約束せぬものが指まで斬られますか、あいたツたア、未だ此  
 様に血が、そ、見て下さい、ね前さんといふ御立派な御内儀  
 のあることは些ども知らなかつたのさ、旦那には是ほど堅い  
 約束までした妾、女房にしなけりや何うして下さるんです、  
 は、ハ、ハ、ハ、腹が立ちませう、お前さんが此家のね神さん  
 ならお神さんでもよろしい、が、全妹妾の身躰は何うなさる  
 んです、亭主には密通の科で放逐されて行く處がないんです  
 よ、お邪魔でも暫らく此家のお世話に成りますのさ、おや、  
 お前さん俄かに舌が無なつたか、さ、何うとも仕て下さる

紙 ら ば



な、ろつぢれつてエ、人を散々弄さんで其ま、濟と思やア的  
が違ふのさ、女房にせなけりや仕ないで好いサ、今に見やア  
がれツ

云ひも終らずツと立上りて根元ゆるみし島田番をふりながら  
淵張りたる大聲振上げ、

「此家の旦那は他人の女房と密通しなから」

番頭は驚き慌て、飛上り、片手にお達が袂を掴み、片手拜み  
に伏拜みて、

「ど、何卒お静に、萬事はコ、此胸に、へッ、へッ、キ、詰  
ど貴女のお顔は立てまする」

「へん當然さ」

ツカ／＼と長持の側へ進行するま、雪の細腕ぬツと伸して中  
へ手を差入れぬ、

「さ、旦那、お出なさいよ、何だねエ、お前さんの御宅さ  
無理無様に引摺出さるゝ主が様は、いかに一目見るより内儀  
は聲を得立てず泣仆れて正寝なし、

左文治は膝鉋く、

「やい番頭、身共が談共は何とする、あの縛上げた代物二千  
両で買ふか、さあ番頭、ろつきよろくせずと返答せいでッ」

番頭は無念の涙に咽びながら、嘸みすく、斯る悪黨に大枚二  
千両してやらるは身を刻まるゝより惜けれど、三代此方ふく  
ろび一つ出来さぬ大國屋の暖簾には替られじ、まゝよ火事に  
出合しと思歸めて二千両やつて歸さんものと、物をもちはず  
起上りて、

「長松佐吉、一番の藏へ来い、旦那只今耳を揃へて二千両差  
上げます」



「ひ、早くせよ」  
折しも突然表の方より誰とは知らず、  
「いや待て、其金決して渡すに及ばぬぞ」

其二十八

もし悪にも強きもの善に強ければ、善に強きもの過つて一度狂  
ば亦悪にも強からむか、左文治生れて心直に行正しく、孝子  
の名藩中に喧く、曲りしこと、ゆへば針はどの事をも憎み退  
け、義に感ずれば三尺の童子にも膝を屈して禮を欠かず、天  
晴れ行末頼みある若者やと知るも知らぬも感じあへりしに、

さりとてはうたてや、  
容貌は菩薩の再来に似たれを内必夜及の如きお進が色に狂ひ  
唯一滴の涙の露に身を淨せて鐵壁の心微塵に砕け、果は君を  
忘れ親を捨て同志に背き良心に反き、たゞれ逆最愛や可愛や  
とばかりにさんぐの憂身をやつし、霞日の項固に引替は今  
日此頃は粹とやら意氣地とやら、起居振舞淺ましく異りて、  
朝より夫婦差向ひのどり膽に微酔の機嫌顔はたくと、五  
のこなし言の節さへ天晴れ悪黨に成澄し、  
筒持せの古い手段を新らしう焼直して不敵にも晝の日に大  
長持擔込で大國屋へ乗込み、うまくと大枚二千兩擱去ら  
とせしに、忽ち表の方より其金渡すに及ばぬと大喝しられ、  
思はずお進と顔見合せて色を變しも、元來あくまで肝太き井  
牟田左文治、やがて胴骨を据ゑてビクともせず、振返りさ



ま膝を叩いて叫びぬ、  
「何者ッ、面つん出せッ」

聲に應じてズツと入来りしは色黒く骨たくまじき大兵の鞞而  
男さも、無作法に會釋しながらノサクと大股に歩みてお進

と左文治が間へドカと坐して、突然、  
「若様、左文治さまッ、奴めが面に覺が御座るか」

「やあッ其方は」  
「甚平めで、先づ相替らず御健祥で、奴め祝着に存まする」

いひつゝお進が顔を覗くが如く見やりて、  
「エ、汝は何者ぢや」

お進は痲癩筋を雪の額に現して、ツンと澄しながら、  
「左文治が宿の妻、三文奴の知らぬことさ」

甚平かツと怒りて、岡太き聲願はせ、

「ダ、駄れ、その口で大事のく若様を見事悪黨に仕おつた  
なッ」

其ま、鋭く光る眼を轉じて左文治が顔をヒツと見詰めしが、  
見るくうちに一杯の露を含みて、

「若ッ、自昧、そ、その御姿はナ、何で御座る、井牟田兵部  
様ともあらう御仁の御息と見なまするか、あ、コ、此甚

平めはお前様を探さんと、諸々方々を尋ねた末、此大阪と人  
の噂に聞いて来て見れば、なに、何事で御座る、いまく

い、  
御少時折は父上母上に御孝行にて、御學問さへ人並すぐれて

天晴れ行末は他人の夜るを聴く甚平まで、鼻が高ふ御座つ

たに、情けない、口惜しいッ、この在様、それ程まで女が  
可愛う御座るか、御國を御出立の折にゆすり語りまでせよと



父上が御教訓あそばしましたかッ

其二十九

左文治は黙して一言の答もなく、絶て久しき家來が涙にうるむ眼を見詰むるのみ、甚平双の拳を固く擔つて我と我が膝をゆすりながら、

「これ若、あゝ左文治さま、貴方様は現在の親御の死目にさへ逢はずに、此やうな阿女に迷ひて」

「なに親の死際」  
思はず膝を動かし眉をよせて訝かる左文治、その顔下より恨

めしげに見上げて今は堪らず、我知らず、眼鼻の間を叩きつ

「腐り果た根性でも親と聞いて其れ顔は、逆の糸ほどの良心が宿ると見ゆる、これ若様、貴方様は餘ッ程不孝なッ」

「なんと」  
「ト、殿様は、後月の三日の夜、計らず御切腹ッ」

「なに御切腹、切腹せつ、こりや甚平それは眞實か」  
「あゝ誰が嘘を申しませう、其日殿様は何時よりも御機嫌よく、

けなされ、この甚平めを御召なされて、こりや甚平あれを見

い、予が今差込みたるが、何と好い枝振ではないか、梅はよく風雪に堪えて萬づの花に魁て開き、四君子の一に數ねらる

れど、もし些少の手入れも加へず荒野の末に捨おかば見る人



もなく、たゞ小鳥の羽がひを休むる他は、百年経つても世に出づるなく、果は名もなき雑木と共に枯果てむ、こりや甚平、人も其通りぢや、名木に生れて好もしき燕を持てばとて、時期に合はずば荒野に枯果むのみ、と、心ありげに御意ありたる後、其方明日は都へ上り悴左文治を尋出して我に替つて意見を加へ呉れよ、彼は此頃素性も知れぬ女に溺れて國の大事をすら忘れ同士の方々に背き身を隠せしよし、この頃都より下りし仁より聞たり、あゝ、我も殿の御前に用ひられず、小賢しき左右の議論に遮られて我意見は少しもとほらず、所詮少くない世ぢや、頼みに思ひし悴は不厭者と成りし様子、あゝ、甚平此胸が苦しいぞ、お眼にナ、涙が、其夜は心地よく御召食つて御寝なりしが、これ若様、殿様は、其夜の中に御切腹

借は昨日の御言は御遺言であつたかと、ダ、下郎め、勝がひつくり反つて涙も、人間の生涯を梅に譬ての御物語りが此耳に残つて、今もありくと、噫ソ、夫に貴方様は不孝不埒な武士にあるまじく他人の家へゆすり強談に御座らつしやるとは、ゑ、ッ

己が膝を搦むしつて無念の齒を堅く噛しめ、益大の両眼より豆粉を欺むく涙ぼろくと滾す面つきの無様さ、繪さそこねし鳥羽繪の仁王尊を見るが如し、

一座しんと静りて音も立てず、流石の毒悪のお進さへ漸次に頭を垂れて眼に涙を浮べぬ、それを見る左文治が胸の苦しさは甚麼、両手を組んだるまゝ、額を己が膝に押當てビク／＼と頭を動かして、片手に掴みながらツと身を進ますよと見れば、突然左



文治が襟がみムツと捕ねて引据ぬぬ、  
 「若、チ、父上の御噴勘で御座る、骨肉に徹へたかつ、骨身に」  
 力を極めて主が肩先碎けよとばかり丁々發止と撲据ぬ、あれ  
 よと驚き絶り止むるお逆を片足あげて蹴反しさま、  
 「おのれが、有したためにコ、此若がつ、ゑ、退けッ」  
 なほも續撲ちに五つ六つ、亂れて顔ふ群はげしく、  
 「斯くまで見下げし貴方様とも知らず、逆々尋來て此様を見  
 る胸は張裂けるやうで、無念とも残念とも、ゑ、ド、何うし  
 てくれラッ」  
 たゞ忠義一團に凝固りて今は夢中の甚平、大の五臓を撞と抛  
 出し男泣に咽入りぬ、  
 「詫つた、これ甚平、ゑく甚平、黄泉に御座る父上初め、ッ

ば ら 娘

ッ其方にも改心せし左文治が赤き心を、見せるぞッ」  
 叫ぶ聲もろとも、腰の小刀キラリと抜放して曰が横腹へズバ  
 と突立て、さッと逆る血汐を見せしと袖もて傷口を押へ、口  
 を一文字に結んで苦痛の体、甚平あゝと仰天し、  
 「やッ、やッ、若、若様ッ」

慌て、抱起さんとする甚平が手を、お逆は半狂亂に拂退けて  
 「ゑ、左文治さま、短氣な事を、ナ、情けない」  
 おのが心の毒悪無惨なるだけに神もつて命と迷ひし男には人  
 一倍涙もろきものを、現在最愛可愛の男が赤に染りて苦痛を  
 忍ぶを見るに逆の悲歎、ヒシと男が五臓に抱付きて嘔にもあ  
 らず手管にもあらぬ眞實の涙に前後五臓を亂して泣伏しぬ、

ば ら 娘



山寺の鐘今日も暮ぬと告渡りて、落花を誘ふ春雨の音淋しき  
 頃、何處の誰か愛身の末ぞ、軒破れ柱曲める小き庵のうちに  
 端座して普文品を誦する年若き尼あり、見れば緑の黒髪惜氣  
 もなく根元より斬下て、白き布子の上へ墨染の腰法衣を纏ふ  
 たる風情あはれに見る影もなければ、雲を欺く額、愛嬌溢る  
 一服元、さらく数珠おし揉む手元の細く優しきは、見ても  
 も見違ひもなき毒婦お進なりさりとば、お進そも、何として  
 訪ふ人もなき斯る悵鬱さ庵に行ひ澄ますぞ、

其三十一

片眼片輪は愚か、一目に戰慄するばかりの醜き姿に生れたり  
 とて、我心正しく浮世に罪科つくらすば、白晝の大道狭しと  
 大手振つて歩めばとて、誰一人として咎むる者もなきに、あ  
 たら美人に生れながら、大膽不敵の本性さらけ姿容にも似す  
 十六の小腕に人三人までも害めし毒惡不逞のお進も、又是血  
 沙のかよふ人間なればにや、戀といふ一字の爲には存外もろ  
 く、一度左文治を思染めしよりは我さへ我心を知らざるまで  
 に可愛く、ゑ、お前故なればと、ボンと命までも拋出して他  
 愛もなく、果ては行末頼みある若者を邪道に引入れ、夜毎の  
 口説きに泣く笑ひつ可愛の男に國を忘れ親を捨させ、なほ脚足  
 らず武士に有るまじき強迫までさせて、ね前さんも段々腕が  
 凄ふね成りだよ、頼しいねと、芙蓉の背に無限の笑を浮べ  
 し世に間違ひし愛情の末は、悲しや我ゆへ大事の男が無惨の



鬼の眼にも涙はあり、まして毒婦なれども未だ漸やう十七の  
 小娘、惚て惚て惚抜きし最愛の男が自殺の悲歎に前後の思案  
 もなく、死なば諸共に同じ白刃に我も自害せんと思しを、  
 男が臨終の呼吸の下より、コヤツ白痴め、さらりと悪事を悔  
 れば眞人間、今生の罪はろぼし後世の身の爲めに尼ともなり  
 てど、唯一言を此世の名残りに消果てしより、悲しさをやせ  
 なさに胸まで込上げ来る血の涙を呑込み、主が形身の一刀取  
 なはして背にも餘れる黒髮根元よりふつりと斬りて、満座の  
 者に犯せし悪事を包ます語りて、偕大國屋が慈悲にこゝ山崎  
 天王山の麓へ庵結んで、雨にも風にも讀經の音を絶たず、念  
 佛修業に行燈まし、伯母を初め我身のために命落せしもの、  
 菩提を吊ふにぞありける、

屍日は世にも恐しき毒悪無惨のお逆、今日は清光尼と名も心  
 も改めし比丘尼、さらりと前非を後悔して本性の善に立かへ  
 りては流石に犯せし今迄の罪科おそろしく、朝夕佛に仕へな  
 がらも無惨に殺せし伯母が面貌辰馬が姿、さては船頭権太  
 か苦しき問わし最後の様子の絶間なく眼先にちらつき、おの  
 れ怨めしのお逆めと叫ぶが如き聲しば、耳の底に聞ゆる、  
 敷珠さらく、と押揉んで彌陀の稱名喝ふれば、不審や何事も  
 打忘れて身は淨土に遊ぶ心地こそすれ、小夜ふけて天地に音  
 なく、雨しよぼく、と窓を拂ひて桑鳥の羽叩さへ聞ゆる折  
 は、天にもあらず地にもあらず、何處よりともなく、あゝ苦  
 しい、恨めしいと、糸より細き聲にて叫ぶかと思へば、また  
 何者とも知らずサメく、と泣く聲四方に聞ゆる、エ、心弱し  
 人の命終るときは三魂天に歸り六魄地に歸る、魂は一氣の廻



れるもの天に等うして形なし、魄は動作痛癢を覺ゆるもの地  
 脈に類して其述ありと聞けどさりとほ怖ろしや前非を悔ひて  
 今この山里に未だ散り初めぬ色を埋めて、無念無想に佛の御  
 名を唱ふる心わはれと伯母さま辰さま権太どのにも照覽あれ  
 ど、曇日の不敵さに引替へ今は此一匹さへも容易く殺しぬ  
 清光尼、我から我心せめられて、今宵もまた此不思議に遇ひ  
 ぬ、  
 昨日より降出し雨は霧の如く、四邊なるとなく薄暗く、春さ  
 はいへど吹く風肌層に染て冷かに、只さへ寂寥しき斯る片田  
 舎の夜に入りては一入物凄く、ボチリくと聞ゆる點滴の音  
 遙の森を吹拂ふ風の聲、十町に餘る隣村より細々と宇宙を耳  
 りて切々に聞ゆる犬の長吠、前の小川を流るゝ水の音の他は  
 天地の間にソヨとの音なく、持佛に献げし御燈の火は戸の隙

子より折々吹入る風にあはりて揺めくさへ心細く、未だ宵な  
 がら寂莫たるさまは奈落の底に沈みし如き心地せられて、思  
 はず戦慄せし清光尼、又もありし曇日を思出て火鉢の火をせ  
 りりながら愛に沈む折しも、  
 「お蓮、ね遊さん」

其三十一

誰とは知らず、何處よりともなく細き聲にて呼びぬ、清光尼  
 はッど驚き小首を傾け耳を澄まして稍暫し、されど其後は閑  
 として何の音もなし、借は我心の迷なりしか、何事も心意の



炎焔より種々の悪魔をつくと聞く、あゝ修業の足らざる故  
かゝる迷も起るならむ、南無阿彌陀佛と唱名しながら観  
念の眼静に閉しぬ、稍ありて又、此方は表の戸をホトくと  
叩く音あり、音は次第に高まりて人の訪来しさまなれど、今  
の我身は世を捨て世に捨られて訪ふべきものもあらず、訪は  
るべき友もなし是も心の迷にやど、静かに座して動かす、  
「お蓮、お蓮」  
聲はありくと二聲、清光尼不審の眉を寄せて、

「誰ぢや、何方さま」

「誰でもない、其方の伯母ぢや」

とッ身毛の毛しざり、思はず身を裸はせて見返る彼方の障子  
に、俄にバツと火の光現れぬ、あなやと思ふ間もなく朦朧と  
うつる人影、あまりの怖しさに五臓を締めながら、

「南無阿彌陀佛、」  
小聲に念佛して眼を閉せば、スルくと障子を開くる音して

「お蓮さん、お蓮さん」

と地の底より叩ゆる如き物凄き聲もろとも、ぬツと半面差出  
せしは、色青く、骨現はに、凹みて底光りする両眼に涙を溜  
め、怨めしげに口惜しげにニヤくと淋しく笑ふ姿は、たし  
かにありし幾日の辰馬が亡霊と見ぬぬ、障子に女の髪の毛さ  
らくと音して、

「へ、へ、へ、これお蓮、あゝ苦しい、あゝ」

は堪らず、身を起して逃山さんとするに、不思議や總身ごと  
ごとく麻痺て手足動かす、其まゝ顔を壁に押當て袖もて頭を  
かくせば、此度は天非の方より、さも氣味悪き聲にてカラク



と二三人の笑ふ聲しぬ、障子ともいはす戸ともいはすべりく  
パリく、と凄まじき音すると、壁にゆさく、と家内震動し初め  
ぬ、あれよと驚き頭を上ぐれば、佛に手向けし線香の煙細く  
微かに立揚りて、風なきにユラユラと揺めくよと見れば、ス  
ツと立願れし伯母の姿、ハタと此方を睨みてケタケと笑ひ  
癒て掻消す如く消失せぬ、  
清光尼は更に生たる心地もなく、身を顛はして神佛を念じつ  
いけぬ、

ば ら ば

「これれツ覺わてゐるか、へへへ、お遊さん久しいねエ」  
眼の前へぬツと立ちし船頭楳太、怒りに血奔る眼を光らせて  
枯木に似たる細き手を差出し、清光尼が襟元ひづと掴み、  
「へへ、へへ、ね遊さん、お前エに斯うやつて、へへへ」  
咽笛ぐいとめあげぬ、清光尼苦しさに手足を蹴りて、

「あれツ、あツ」

必死と上げたる聲に驚き仰げば、あゝ夢、さては夢、夜は森  
々と更亘りて春雨の軒端を拂ふ音しめやかなり、  
折しも又ホトくと庵の戸を叩く聲聞ぬ、清光尼は耳を澄  
して小首を捻れば、香は愈々はげしく、  
「御免なされ、御免なされ、夜路に迷ふて東西南北もわから  
ぬ旅の者、お庭の隅にても苦しからねば一夜の、今宵一夜の  
宿泊を、お頼みで、もし、もし、御免なされ」  
聲は正しく男にてしかも、夜路に暮せし上雨に惱みしものと  
見ぬて五音の調子に顔帯たり、清光尼しばし頭を垂しが、  
「こゝは浮世を捨し尼一人の住居ゆへ、ね宿は平に、この前  
の経路を左りへくと行けば大路へ出ます、其處から二十  
町、いや十五丁もね行きなされると宿屋があります」

ば ら ば



男の聲は力なげに、さながら乞食が一飯の衰れを請ふが如く  
 「重々御道理なれど、この通り一寸先も見ぬはせにて、其  
 うへ足を、痛めまして、はい、真に御無理御難題なれど、人  
 を救けるは佛者の勤とやら聞きますれば、押付にて何ども、し  
 かし、何卒お慈悲に、夜食も申受ませぬ。また夜の物もいり  
 ませぬ、たゞ雨さへ盛げば、はい、お慈悲を」  
 泣きばかりに口説たつる人の哀れに、現在尼一人の住家へ男  
 の客を宿すは世間の開ぬ、身の謙慎にも何とやらとは思へど  
 捨もおかれず、漸う心を定めて立上りながら、  
 「お待ちなされ、今開けまする、しかし尼一人の住居ゆへ何の  
 ね構も、たゞね寝みなされる分は」  
 いひつゝ風に手燈の明り奪去られじと袖もて掩ひながら、足  
 の運さへントくと歩むさま、何として一夜に人の命三つま

で奪ひし幾日のれ運と思はるべき、静かに戸を開きて、い  
 ど、案内する其時、ぱつと照す、燈火の光に旅人が顔を只一  
 目、  
 「やあッ」  
 必死と叫びてタヂくと二三歩後へ跟めき撞と倒れて、口の  
 中にて念佛を繰返しぬ、燈火消えて四邊は再び如法の闇

其三十二

雨は益々降しきりて、梢を動かす風の音、軒端を叩く雨の  
 ほかは、天地の間にそよとの音なき寂莫無聲の物淋しさ、漸  
 次く、に更ゆく夜は早や子の刻近くもならむ、僅に消残る火



桶の中をかきひろげつゝ未だ寝もやらず幾度か首を捻りて思案に沈む旅人、面色黒く五臓の骨格丈夫に、眼の恐しげなるは何處やら見覚えありげに見ぬ、稍ありて旅人のハツと膝を叩き、

「む、散りた」

いひつゝ膝を向なほして、頭を垂れ専念に数珠つまぐりつゝ頭へゐる清光尼が横顔へ物凄き嘘をジロリと呉れて、

「尼御世、斯う見たところ未だお年も若い様子、勿論ないもの、其房々ど黒い髪を根元から斬つて、あゝ惜しいこと、近所隣家も遣ひ此山里に只一人住居とは、へゝ、何れ、ね嬉しい譯仔細が、但しは大事の所夫にでも先立たれたといふ寸法か、一つ河の水を飲も縁の端といへば、斯うして御世話になるも何ぞの、尼御世、なんと身の上語りして下されぬか

ジリ、と膝押進めてヒツと見やる眼には什麼なる光りあらむ、清光尼は重たげに頭を上げて、

「世に似た人、多といへど、除り、貴方様のお姿がさる御人に、瓜二つと申しませうか、それゆへッ、はゝ、罪深

い妾の身の上語りするも今更ら怖しうて、夜も更けましたれば、定めて疲れても御座らう、尼が一人住居ゆへ夜の物も薄

ければ、納戸で、妾は佛に通夜いたしますれば」

旅人は一癖ありげの面つきに冷かなる笑を浮べて、影はの暗き御燈の光かつて持佛の方ジャク、

「む、ナニ釋の智香大姉、俗名近藤辰馬、やあッ、やあッ、釋の孝義居士、俗名権太居士、いよゝゝそれだッ」

叫びながらギョロりと両眼を光らせ、清光尼が片袖をムツと掴みて薄氣味悪くへゝゝと笑ひぬ、



「かう於選さん、いやさ於選坊、久しいねニ、權太だ、あ、うじ虫の權太を忘れたかッ」

聞くより清光尼は氣絶せむばかりキヤツと呼びて飛退き、リ、と震ふ左右の手をシカと膝につかへて、合はぬ齒の根を嘔しめながら、

「妾の名を知る上、サ、權太と名乗るからは、矢張り、南無阿彌陀佛」

「あゝ縁起でもねエ、念佛なんざア穢らはしいや、かう聞かぬ、尼に化けても手前ニは確に於選坊だ、おれは權太だ、昨年十月臘月夜の船の上で、この咽口をグイとやられた權太だ、べらぼうめツ、幽霊が聞いて呆れらア、正真正正銘の人間様だツ、お前エの凄腕で、さんぶど立つた水煙と共に十萬億土へ一足飛び、青鬼赤鬼蹴飛ばして閻魔の前で文句て有らむ

限りならべた上、角力の講釋袁源道の説法、八萬地獄で權太阿兄いと唄はれる筈が、妙を蓋棺で死ぞこなふたは、其處でフイと弱氣がさして、あゝつまらねエ、今までは悪い事をした、是からさらりと心を入替へ堅氣に稼いで人間の仲間に入らなきやならねエと、其時救けてくれた武士の伴して江戸行サ、半歳の間は仲間となつて眞面目に勤めて、今ぢやア名も江戸屋權吉と改め故郷忘じがたしとやらで元の古巢へ廻戻つての旅商人、商品の煙草の煙より細く長く暮すつもりも權吉、から於坊選、手前エに怨はいふまでもねエ、が、圓めた手前エの頭と堅氣になつた巳が心に免じて、濟だことは何にもいはねエ」

一句々々涙に聞終りし清光尼、果は堪ずやハラ〜と膝に降らして、切々の聲發らせ、



「あゝ権さん、真に、れ前さんに合えず顔も、なけれど、今では見らるゝ通り此様に、真もつて前非を後悔して朝夕念佛三昧、伯母さん初め、皆な善提を用ふてゐます、サゝ権さん、斬ても刻んでもお前の腹はいねまい、なれど、ゆるして下され」  
後は言淀みてわつと泣伏しぬ、

其三十三

権太も哀れと無言のまま、腕を組みつゝ、ヒツと清光尼の襟筋の邊り見詰しが、花こそ苦なれ女は二入とは誰が唄ひし、黒

漆の髪無様に斬下げて、水際たちし襟首の細く渡せたるはま飾らぬ天眞の美形は難日に勝るとも劣りはせぬ麗しさ、是だけにして大の男を憐殺べき價值たしかにあるに、柳の眉間に皺うちよせて雪より白く頬に墨染の法衣の袖を挿當たる風情、小僧きは愛らしくいぢらしく、権太忽ち滿心の慾火をかつてパツと燃出せし煩悩、  
あゝ堪らぬ、あゝ迷ふた、よしや佛の御厨あたりて生ながら地獄の底へ真逆様に落ればとて何として此姿空に見過さるべき、あゝ鑑よ昔の権太に立戻つて否といはうが何と云はうが金輪奈落、見事横車押して見せむ、れゝそれよど、ふるくと慄ひあがりて、突然法衣の袖をグイと捉へぬ、  
「あゝこゝな罪つくりめッ」  
思はぬ権太が襟に清光尼は仰天し、慌てゝ其手を振拂ひさま



飛退きて、數珠もて肩の邊り拂ひながら聲ふるはせ、  
 「ナ、何を、權さんお前さん何を、佛に仕ふる清淨の身を」  
 いひつゝ、詰と容を正して凄からぬ眼に睨詰めたる清光尼、恥  
 かしきにもあらず怖しきにもあらず、大の男を手鞠に取つて  
 腹さんぐ、弄びし羅日の於遊なんとして恥かしかるべき、さ  
 れど今は身も心も洗清めて専念佛に仕ふる清淨潔白の清光尼  
 たどひ源氏の君と業平朝臣を搦合せしほどの男に、情けのあ  
 らむ限りを盡して涙もろとも口説ばとて、大盤石、シツかと  
 心を据ゑてピンと鍵かけたる胸の錠前押せばとて突けばとて  
 何條開くべき、權太はシリく、と摺寄りさま、  
 「これさ、野暮ぢやねエか、男が女の袂を捉ゑりや知れたこ  
 とさ、ゑ、ソ、其顔が命」  
 權太は理も非もなく涙多無性に力を極めて清光尼を引作さん

は ら ば

とす、倒されまじと此方は身を跳きつゝ、

「あれ何を、昔の於遊では、色も香もない今は尼の清」

「む、れたつう氣取な、眞更ら初ての色ではなし、一夜でも半

夜でも抱て寝た男だ、憎くアあるめエ、抹香臭エ煙に巻れて

暫らく男の肌には寄るめエ、へん久し振だ」

無狀に引寄せ尙も力にまかせて押付けんとすれば、清光尼も

去る者さうはさせじと身を捻りて飛退き、數珠もて權太が横

面ビシヤリと喰はせ、

「穢らはしい、南無阿彌陀佛」

權太は赫と怒りて、

「ぎいた風をやりやアがるナ、そんな事ア淨世に眞面目な尼

のいふ事だツ、夫殺し伯母殺しの大悪黨の口から出る音ぢや

あるめエ、ウンといやア可愛い宿の女房、否と吐しやそれま

は ら ば



百四十八  
 でだ、散々なぐさんだ上女郎に叩賣つて酒にする、但しは嵐  
 山の一件をへい御免なせいと出かけるか、念佛三昧に夜を忍  
 べばとてズキが廻りや坊主首が宙に飛んだ、二つ一つだ、あ  
 ツキリく返答しやがれッ」  
 かよせし鍍金をはがし、クルリと尻ひん捲りて大胡坐、一度  
 は善心に立返りながら、又もや煩悩といふ悪魔に驅られて  
 再び狂出せしウツ虫の樵木、何とじて一筋二線の縄でゆくべ  
 きぞ、

其三十四

淨世は捨たれど嗜昔の色香は更らに失せぬ於蓮が美容一目見  
 るより、權太氣も魂も身に添はず、あはれ古き怨さへ打忘れ  
 て戀の奴となり終り色慾界の亡者となりぬ、否と遁るはど尙  
 追廻したさが戀するものゝ慣とて、静かに眼を閉し口の中に  
 て彌陀の稱名を唱へて知らざるものゝ如き清光尼が振舞に、  
 權太いよく業を湧し、むらくと差込む痲癩に強叩いて、  
 「聞かなきや聞かぬでいゝはッ、あッ糞、可憂さ除つて憎さ  
 が百倍、嵐山で此首グイとやられた返報だ、さほど念佛が云



ひたきや、成佛させてやらッ」  
躍上つて納戸の方へ駆込みさま、手早く有合ふ出及庵刀れッ  
取り、半狂乱にて飛來り、

「み、見やがれッ」

一聲高く叫びつゝ、法衣の袂をムツと掴みて、片手の出及庵刀  
振閃かして無二無三に斬てかゝれば」

「あゝお前さん、コ、殺す氣か、せうせ此世に希望ない身な  
れど、聞々お前に殺されは、あれッ」

「四の五の吐すなッ、チ、畜生、畜生ッ」

こゝ一轉瞬間の瀬戸際、係命必死と捉はられし權太が手を振  
放して遁出さんと腕く清光尼、

「畜生、畜生ッ、畜生ッ」

色に狂ひし荒馬の如く、前後夢中に武者振つく權太、突退け

跳退け押伏して駆出さんとする清光尼、押つ押れつ追廻し遁  
廻る必死の争ひ、又もや壘かけて斬付んとする權太が手先を  
はづして、清光尼は出及庵刀奪取らんと權太が片手に齒嚙付  
くつづみ、其手狂ふて、權太が横腹ズプリと音立て突込んだ

「やア、やア、ケ、怪我ぢや、怪我ぢや、權さんッ、權さん

ッ、勘忍して下さいよッ」

權太は手足を跳きて七轉八倒しながら、

「チ、畜生、ちく生ッ、人、人殺しいッ」

と身と震はせしが、唇は紫色に顔の色は青く、さながら木像  
の如く双の眼を見張りて直立しが、あゝ物凄し、見るくう  
ちに面色赤味を帯て眼の光輝ラメクよと見れば、積年の邪惡



再び兆して、ビリ／＼と柳眉を動かさず、  
 まゝよ、毒食へは血まで甜れ、この上は佛もいらじ神も願ま  
 れ、れ進ぢや、元の於進ぢや、毒惡非道のお進なりけりと忽  
 ち狂出せし夜叉の本性、手先に至身の力を込めてグイと一袂  
 り、苦しみ隣く權太が横顔流目にシヨリと見やりて冷かに笑  
 ひぬ、  
 一期の悲鳴もろとも撞と仆るゝ權太についで、清光尼もよ  
 ろ／＼と折重つて倒れぬ、其まゝ暫し正氣を失ひしが、はッ  
 と元に返りてムク／＼と起上り、慄ふ手足、躍る胸、あゝ心  
 弱しと足元踏しめながらフラ／＼と持佛の前に跟き寄り、シ  
 カと柱に廻りて片手を差伸べ花筒とり上げ、半ば腐りたる水  
 を取も餘さず香干し、ホッそ一息、やゝ振返りて權太が死骸  
 に瞳をくゝるゝよと見れば、轉せし眼にハタと彌陀の尊像を眺

みぬ、  
 「あゝッ、見よッ」  
 稻妻の閃々如く身を躍らせて、血糊に染みたる片足取げて佛  
 前の飾物はハタと蹴りぬ、無慘、ガラ／＼と音して持佛位牌  
 ごとくく仆れて算盤を亂すを、さも心地よげに見やりて、又  
 もや差伸す手先に當る經卷取るより早く、べり／＼と引裂き  
 引拂る浪藉、  
 「ね進ぢや、お進だいつ、みゝ見やがれッ」  
 叫びながら腫も願はにヨロメキ／＼戸の外へ駈出しぬ、  
 雨は何時のほごにや晴れて、大空は半ば拭ふが如く、睨むが  
 如き星の光に映じて、青葉の露キラ／＼と光りぬ、泥を踏に  
 じりて遙に走りゆくお進が叫ぶ聲は、宙をつたふて糸の如く  
 聞ぬ、



借も世は果敢なきものは人間の生涯なれ、さしものに毒悪不逞  
 のお遊も一旦罪を悔恍し、山中の庵に行燈して餘事なかり  
 も、前世の宿因か其身の業か、顔は花の如く姿は柳の如き川  
 の尼御世、發心得道の因縁は知らねど歳に似合ぬ珠勝さよと  
 隣村の爺婆が鼻つまらせての語草とぞなりける甲斐もなく、  
 權太が事より再び兆せし悪念に神心腦亂し、我から身を魔界  
 へ投込んで行術もしらず、何處の空にて何とせしやら京にも  
 大阪にも幾内五國に於て遊を知るものなく、吹くや嵐、天王山  
 の麓なる有し庵は軒破れ柱傾き、庭には千草茫茫と生茂りて  
 足の踏搦もなく、友に離れし旅鳥、牙ねて、物凄き月のほか  
 は訪ふものもなく、誰いふとなく化物屋敷と語り傳へて荒る

がまゝに荒らすびぬ、

其三十五

慶應の年つきて明治元年となりぬ、王政維新の政令行はれて  
 より、水にたとへし光陰流れ、て夢の如きうちに明治十年  
 とぞなりける、其年の半過ぎ、空には白雲飛で、廠の聲いと々  
 旅人の腸を系ぐり、折知り顔に鳴く虫の音哀れに、涙直る八  
 日の月高くかゝりて物凄き頃、東京は隅田川の彼方、小梅の  
 里なる、梅林庵といふ梵刹の門柱に身をもたせながら、綱笠  
 深くと面を包みたる女非人、次第に更ゆく大空を見上げてア



と溜息を洩しぬ、上野に撞出す九時の鐘の音、水をつたふてポーン……………

釘の如く瘦細りたる手足給ける骸骨の動くが如く、其上夥しく腫物發して血膿シクくと流れ、動かば鼻を貫く臭氣四邊に散りて胸わろさかばり、斯ては生命は惜きものにや、片手に持たる竹の皮包を開きて、誰が慈悲の握飯ぞ、飛付が如く咽口を鳴してムシヤくと食ひぬ、

血うみ流るゝ頬の邊りへひつゝきたる二粒三粒の飯粒を、半ば腐爛し指先もて摘みながら、ピンと親指に弾きて打捨ると思さや、さらに穢しとも思はでや前齒もてしごき取りペロくと舌舐づりぬ、

梢ありて非人は月明りに己が身のまはり打まもり力なげに首うなだれ、何事をか口の中にてツブくと獨語しが、やがて

心を取なほして、へ、へ、と淋しく笑ひぬ、

折しも彼方より人の足音して来る者あり、非人は若しや巡査にはあらずやと、ぬつと首を突出して透し見れば足音せしは夜を警固の查公にあらず、大兵雲衝くばかりの法師なり、法師は他まで鯨飲し般若湯の威勢に、さも心地よげに足元よろくと小音に詩を吟じながら近づきぬ、

「一文戴かして、へ、へ、れ慈悲に」

不意に手を差出して俄手よりぬつと現はれし彼方の非人、法師は飛退きて透しながら、

「あ、何ぢや、何者ぢや」

「へ、へ、和尙さま一文戴かして」

「む、乞食か、無いぞ、退けくゝゑ、臭いはッ」

「ひつゝ、何思ひけむ手を打つてカラくと笑ひぬ、」



「明月に女の乞食、一句浮びさうぢや、面白、そらやるぞ  
 手を出せ、手を、よいか」  
 非人は貫ひし錢を押し藏く途端、何とかしけむ被さし編笠ハタ  
 と落ちて、中なる本尊現れぬ、見れば眉抜けて鼻欠落ち、な  
 は眼の下に紫色をる雁物はれあがりたれど、何處となく、残  
 る昔日の色香、法師は醉眼ながら詰と見やりて、フイと首を  
 傾け思案にくる、風情やがて、大聲に、  
 「やい於逆、どつこい逆さぬぞ、遠はぬく、確かに於逆ぢ  
 や、伯母殺し男殺し、忠義無二の武士にまで腹を切らせし毒  
 婦の於逆、この法師を知るまい、知らぬ筈ぢや、あ、好く面  
 を見いッ」

其三十六

天にも地にも我を知るものあらじと思ひしに、借も何者ぞ、  
 我名を知るは何れ只物ならじ、南無三寶しくじつたりと身を  
 捻向けて遁出さんとするを、法師の透さず引捉ねて、  
 「どつこい爾は参らぬ、アは、ハ、ハ、こりや於逆、今より十  
 三年の昔日、時は九月十八夜、貴様が人殺したる處を確に見  
 たものぢや、  
 いや夫のみか、貴様が間違つた情けで切腹までした左文治が  
 無二の友ぢやぞッ、汝悲惨悲道の悪魔め、ッ、其様を見る、



因果の廻り来たのぢやぞ、今この法師に逢ふたが貴様の運の  
好いのぢや、来い、さあ来い、乃公が寺まで来い、生ながら  
引導渡してやる」

非人は尙も恐れて身を縮めぬ、法師は冷かに笑ひて、

「その様になつても命が惜しいか、人間の終りは善惡共に潔

いが第一ぢや、好く説法してどらさう、来い、あ、白痴め、

世を捨てた坊主が人を殺すの苦しめるのといふ事があらうか、

愚圖く云はずと寺へ来い、餘り貴様のさまが憐れゆへ、佛

者の役目、悟道を教ねてやる、見事の終りを遂させてやる、

さ、来い」

漸々立上る女非人を促しつゝ、おのれは先に立つてソリノ

ソリと大股に歩みぬ、月は早や西に落ちて四邊闇夜となりぬ

法師は何處へ去りしぞ、

非人は何處へ伴はれしぞ、

奇怪の法師甚麼なんをか説けむ、毒婦のれ違何と感しけむ、

それより三日を過ぎて、向島の土手、三圍稻荷の邊りなる櫻

の枝に首をくゝりて、ふらりと下りたる女非人あり、何者の

終りぞ知るものさへなければ、警官立合の上死跡は式の如く

假埋葬をぞなしける、



天上天下宇宙乾坤悉皆空、  
 觀じ去り觀じ來れば美人なく醜女  
 なく善人なく惡人なし、  
 外面を包む皮一枚、  
 むけば同じく白骨一個。

百六十二

薇 薺 娘 畢

明治三十四年十二月廿八日印刷  
 明治三十五年一月二日發行

定假金四拾錢

著 者 奴 之 助

發 行 者 大 淵 涉

印 刷 者 松 井 惠 美 三 郎



大阪市南區心齋橋北詰八十六番邸

發 兌 元 駸 々 堂

(電話東京〇七十一番)



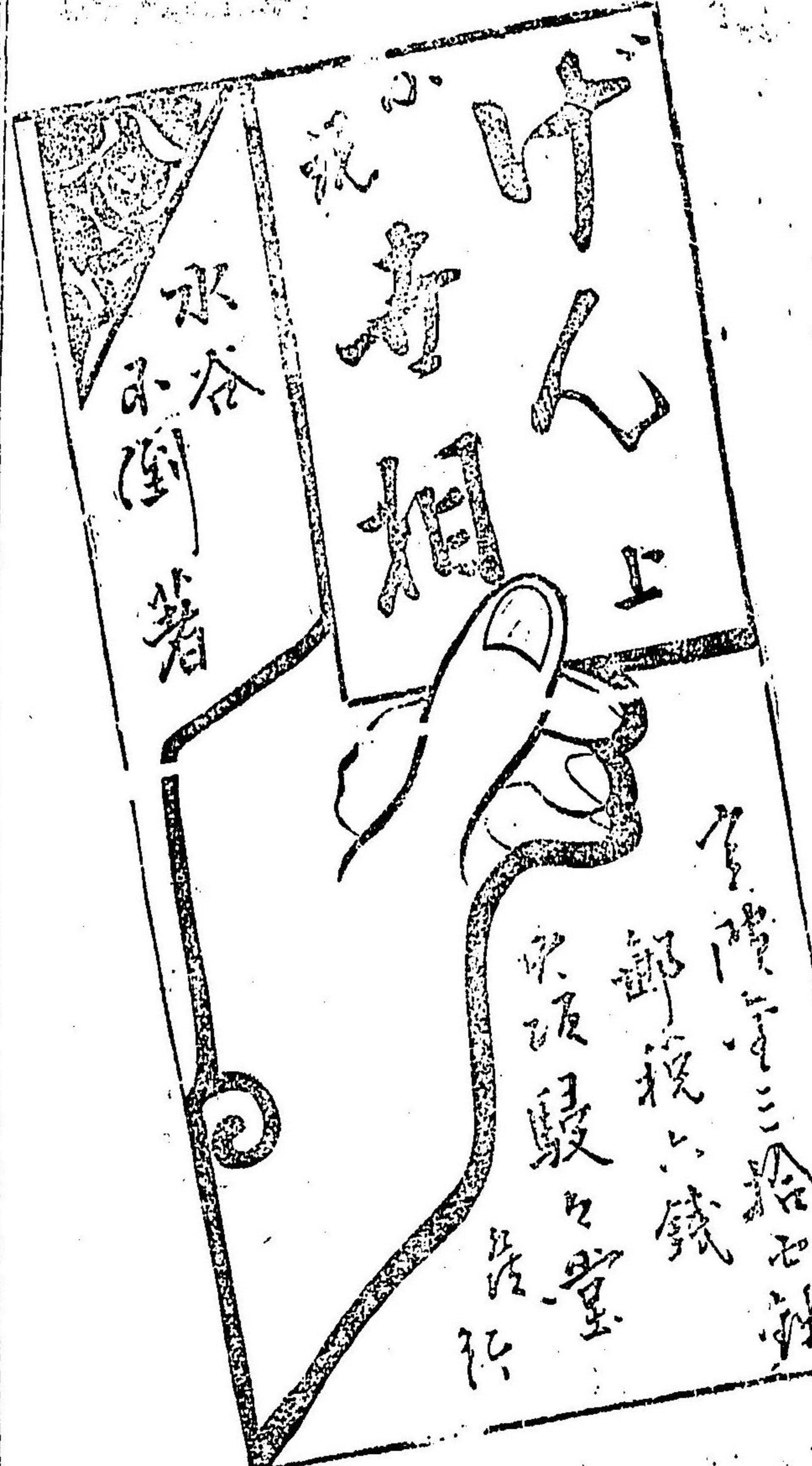
新 版 豫 告

▲ <small>小説</small> 紅いちご 全一冊	▲ <small>小説</small> 遠千鳥 全一冊	▲ <small>小説</small> たみ扇 全一冊	▲ <small>小説</small> 現世相後編 全一冊	▲ <small>小説</small> 舞財天女 全一冊	▲ <small>小説</small> ばら娘 全一冊	▲ <small>小説</small> 後の梁山泊 全一冊	▲ <small>小説</small> 文金嶋田 全一冊
------------------------------	-----------------------------	-----------------------------	-------------------------------	------------------------------	-----------------------------	-------------------------------	------------------------------

▲ <small>小説</small> 娘太平記 全一冊	▲ <small>小説</small> 淀屋辰五郎 全一冊	▲ <small>小説</small> 洗ひ髪 全一冊	▲ <small>小説</small> 夢うつゝ 全一冊	▲ <small>小説</small> 相摸業平 全一冊	▲ <small>小説</small> 重ね棲 全一冊	▲ <small>小説</small> 白百合後編 全一冊	▲ <small>小説</small> 家庭葉第三編 全一冊
------------------------------	-------------------------------	-----------------------------	------------------------------	------------------------------	-----------------------------	-------------------------------	--------------------------------



竹人上  
 先者相  
 永谷 不剛 著  
 定價 三拾七錢  
 郵費 六錢  
 東京 駿河屋 發行



平  
 永谷 不剛 著  
 定價 三拾七錢  
 東京 駿河屋 發行



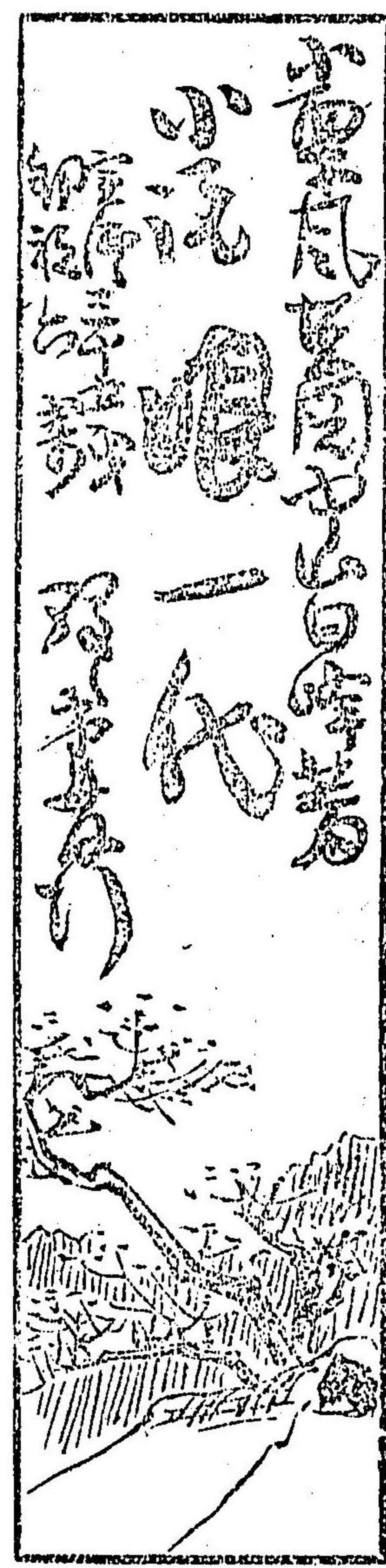
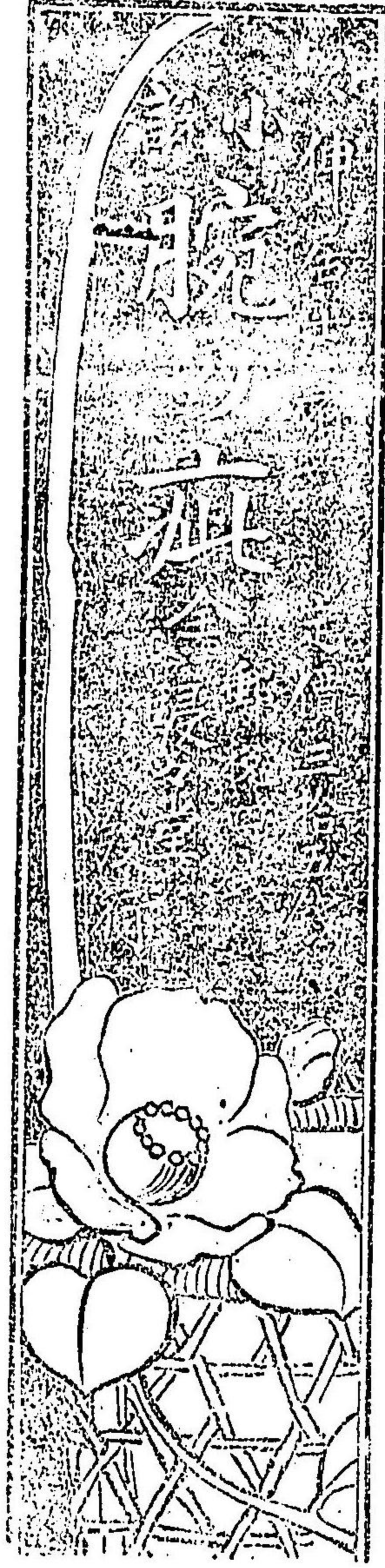
小燈火 完  
 藤浦 一 著  
 定價 金三十兩  
 郵費 六錢  
 東京 駿河屋 發行







定價金四拾錢 郵稅金六錢 曠夕堂發行







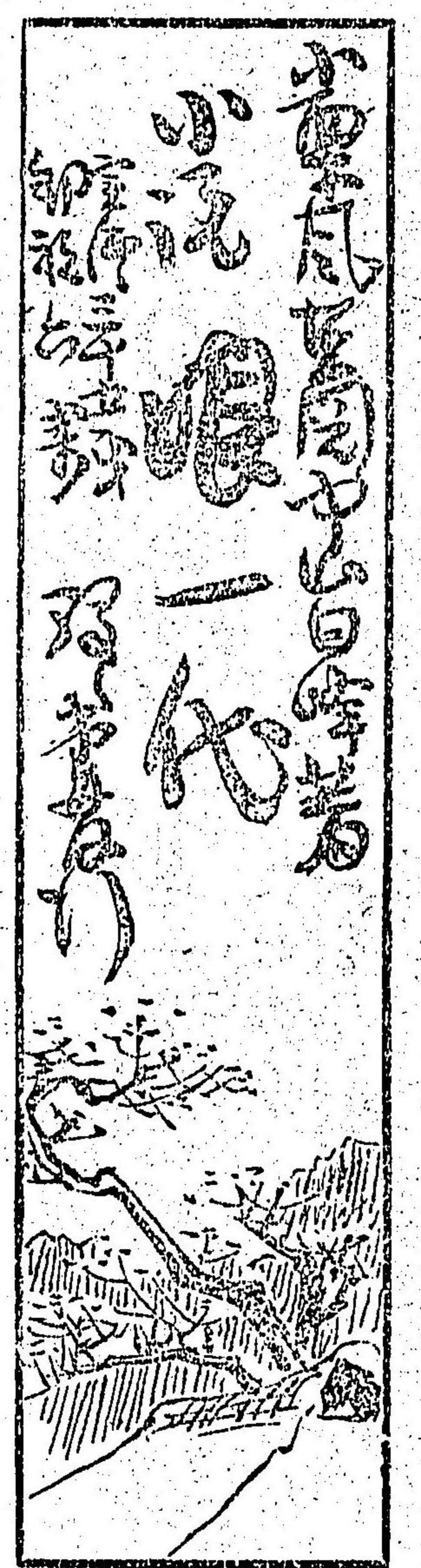
定價金四拾錢 郵税金六錢 廣久堂發行



腕  
疵  
全  
價  
三  
金



小  
説  
兄弟丸  
北條時義  
知徳寺  
知徳寺



小説  
一  
知徳寺  
知徳寺



鳥籠  
鳥籠  
鳥籠  
鳥籠  
鳥籠  
鳥籠  
鳥籠  
鳥籠  
鳥籠  
鳥籠



鳥籠  
鳥籠  
鳥籠  
鳥籠  
鳥籠  
鳥籠  
鳥籠  
鳥籠  
鳥籠  
鳥籠



鳥籠  
鳥籠  
鳥籠  
鳥籠  
鳥籠  
鳥籠  
鳥籠  
鳥籠  
鳥籠  
鳥籠



鳥籠  
鳥籠  
鳥籠  
鳥籠  
鳥籠  
鳥籠  
鳥籠  
鳥籠  
鳥籠  
鳥籠





菊池武敏著

新聞志留子

定價金卅五錢  
郵稅六錢

辰巳堂



根子日記

根子日記

定價金卅五錢  
郵稅六錢



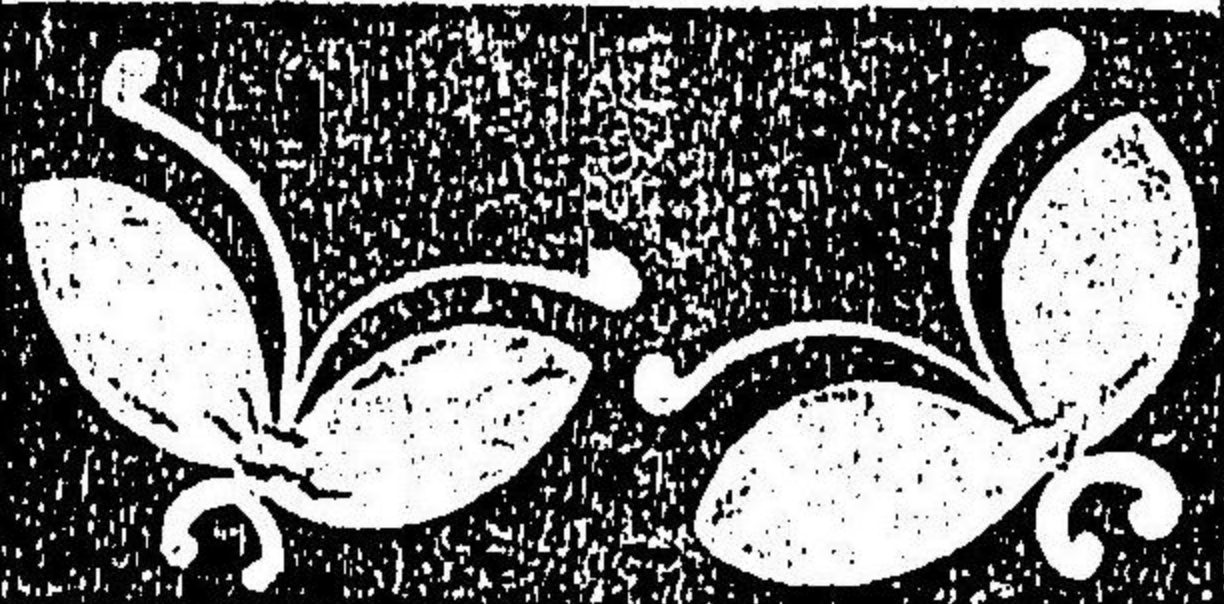
與人物著

小雄蝶蝶蝶

實價金卅錢  
郵稅金六錢

發行所 大阪心齋橋北詰

辰巳堂



稻岡奴之介新作

小美少年

發行所

大阪市南區  
心齋橋北詰

辰巳堂



定價金三十錢  
郵稅金六錢



小說

廣津柳浪著

山下  
雨花

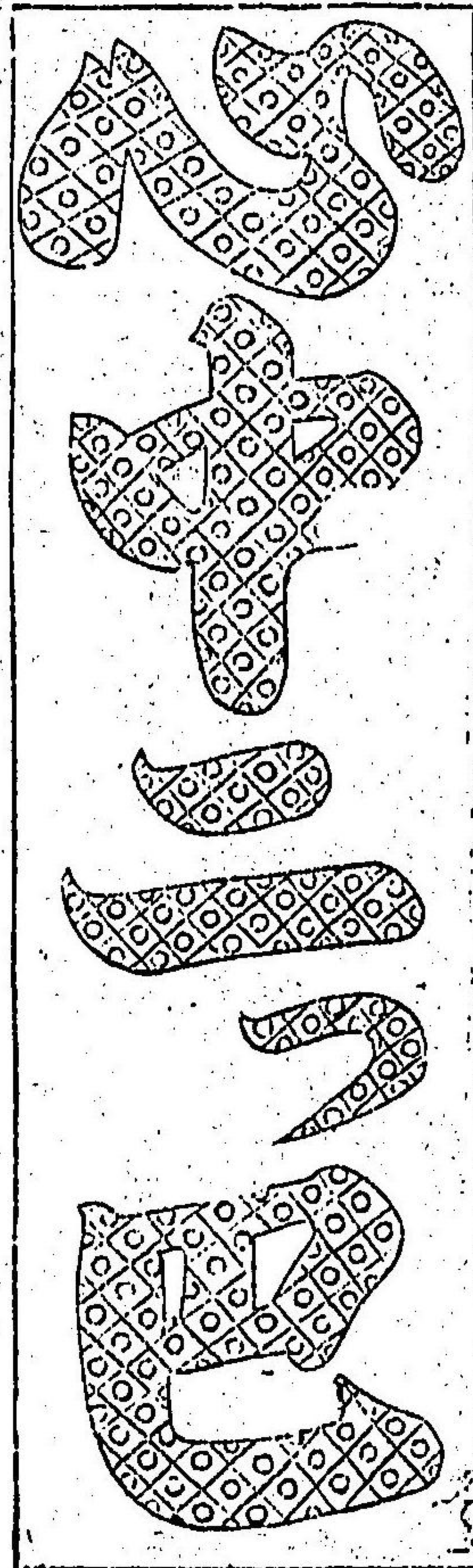
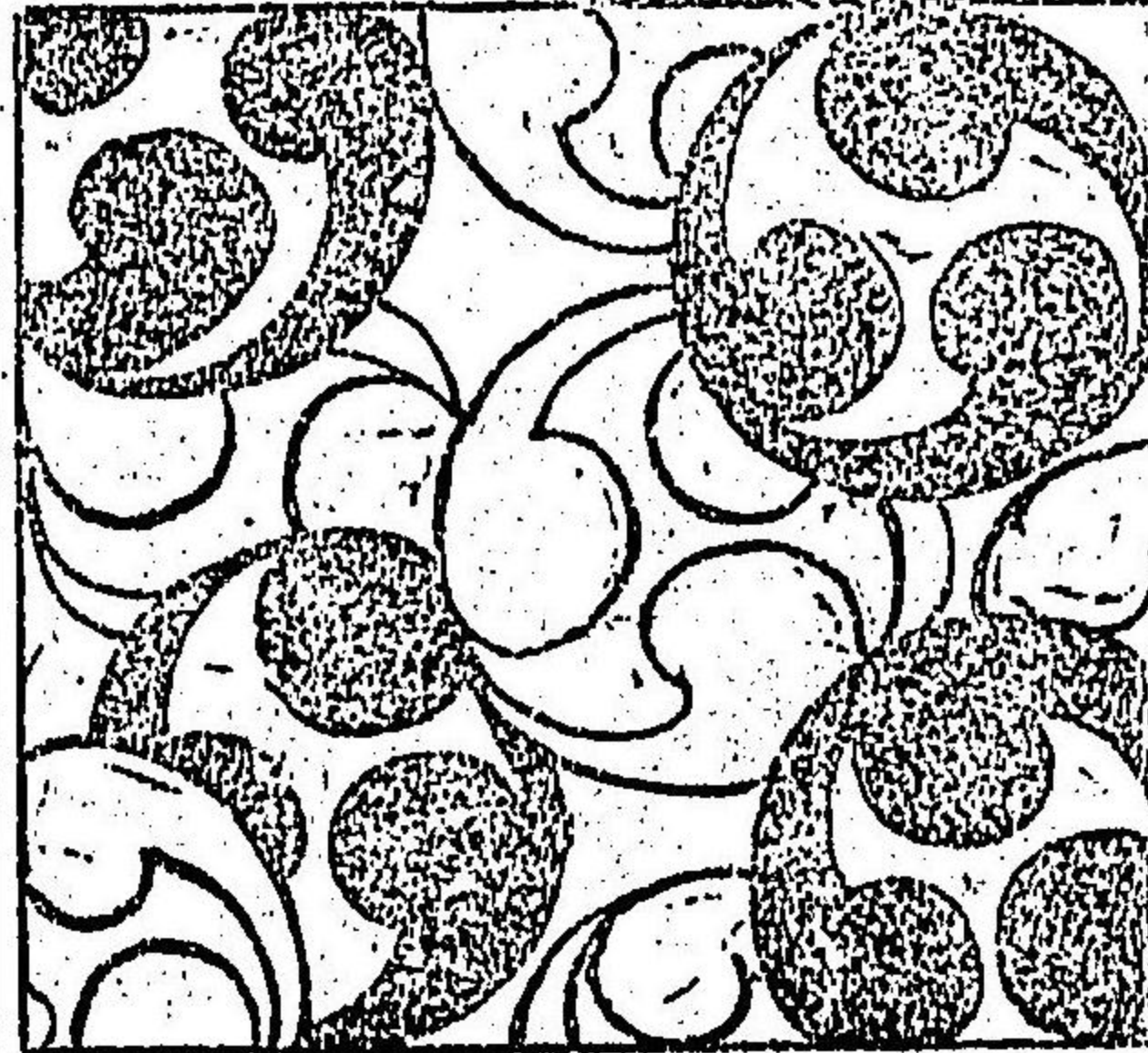
大

惡

駿々堂  
發行

魔

實價三十五錢  
郵稅八錢



九月十五日發行

郵實稅價八十五錢

大阪心齋橋北詰八番  
駿々堂發行  
(電話東七〇番)

小説  
大暗殺  
完



實價金卅錢 郵稅六錢

發行所 大阪心齋橋北詰 駿々堂



正價金三十錢  
郵稅六錢



大阪毎日  
探偵書局

實價三十五錢  
郵税六錢

山にる花作 鬘之巻  
未鬼青鬼

實價三十五錢  
郵税六錢



大阪毎日  
新聞社  
あきしく編

異聞 奇話  
瑣談片々

洋装美本  
金文字入  
實價金卅錢  
郵送料四錢

瑣談片々は文明國と野蠻國とを問はず東西洋と南北洋を論せず坤輿に國をなせる世界各地の風俗習慣草木氣象禽獸虫魚凡そ天地人三才に渡れる森羅萬象の奇事異聞を網羅せるものなれば讀みて面白く語りて興あり之を繕かば不知不識の間に大いなる智識を得ると共に山の如き談話の種をその中より供給せらるべし

發行所

大阪心齋橋北詰八十六番邸  
駸々堂

(電話東一〇七一番)







誌 雜 切 讀 集 每

次 目

第一集	皮英人	第十八集	鬼人
第二集	英人	第十九集	鬼人
第三集	英人	第二十集	鬼人
第四集	英人	第二十一集	鬼人
第五集	英人	第二十二集	鬼人
第六集	英人	第二十三集	鬼人
第七集	英人	第二十四集	鬼人
第八集	英人	第二十五集	鬼人
第九集	英人	第二十六集	鬼人
第十集	英人	第二十七集	鬼人
第十一集	英人	第二十八集	鬼人
第十二集	英人	第二十九集	鬼人
第十三集	英人	第三十集	鬼人
第十四集	英人	第三十一集	鬼人
第十五集	英人	第三十二集	鬼人
第十六集	英人	第三十三集	鬼人
第十七集	英人	第三十四集	鬼人

菊版頗美本  
一册定價金八錢  
郵稅部前金八拾四錢

探偵小説  
向、男女の情に日々に流れ、昨日の潮は今日の潮と、變る世の中に、倍變りぬは小説の趣  
う加勢の激甚と變れ、前はかはらぬ飛躍の速、其根を洗ひ其葉を別、新たに芽を吐く一蓮向、  
他に類の無い探偵小説、奇想妙案神出鬼没、午睡の如に進行の件、内外報は其重寶品、紙  
数は毎百頁以上、代價は僅か銅貨八枚、之を買はばは、之を讀めば、

發行所 大坂心齋橋南區市販大 (番一十七〇千東話電) 堂々巖

庫 文 偵 探

毎月一回 定日發行

每號讀切 探偵雜誌

探偵文庫は斬新奇絶なる材  
料を撰び、名家獨得の筆  
を以て綴られしもの、一丸  
び巻を讀けば千奇万怪、山  
あるかと思へば海嶺は、  
善人善ならずして、悪人悪  
ならず、變幻出沒、殆んど  
讀者が豫想の外に出づ、而  
して文辭の凄麗なる、亦坊  
間に散在する他の比にあら  
ず、讀者若し凄快なる探偵  
誌を味はんと欲せば、去つ  
て文庫を見よ

目 次

第一編	池夜叉阿仙	第十一編	深車強盜
第二編	華族の變死	第十二編	鑛山の魔王
第三編	暗穴地獄	第十三編	可憐の囃子
第四編	慘殺事件	第十四編	數罪の探偵
第五編	西洋幽霊奇談	第十五編	伊吹の探偵
第六編	晒し首	第十六編	二人探訪
第七編	幽霊の電報	第十七編	夜二人探訪
第八編	秘電	第十八編	二人幽探
第九編	秘電	第十九編	海嶺の花
第十編	秘電	第二十編	古茶箱

裁 休  
本紙は美術、石版、寫眞版に  
て新奇意匠を凝せしもの、  
口輪は當代第一流の畫家の  
筆による極彩色の木版摺に  
して、湖殿頗る美木なり、  
紙数は二百三十頁なり

一册	金貳拾五錢
拾册前金貳圓卅錢	
廿册前金四圓卅錢	
郵送料壹圓金六錢	

發行所 大坂心齋橋北區市販大 (番一十七〇千東話電) 堂々巖

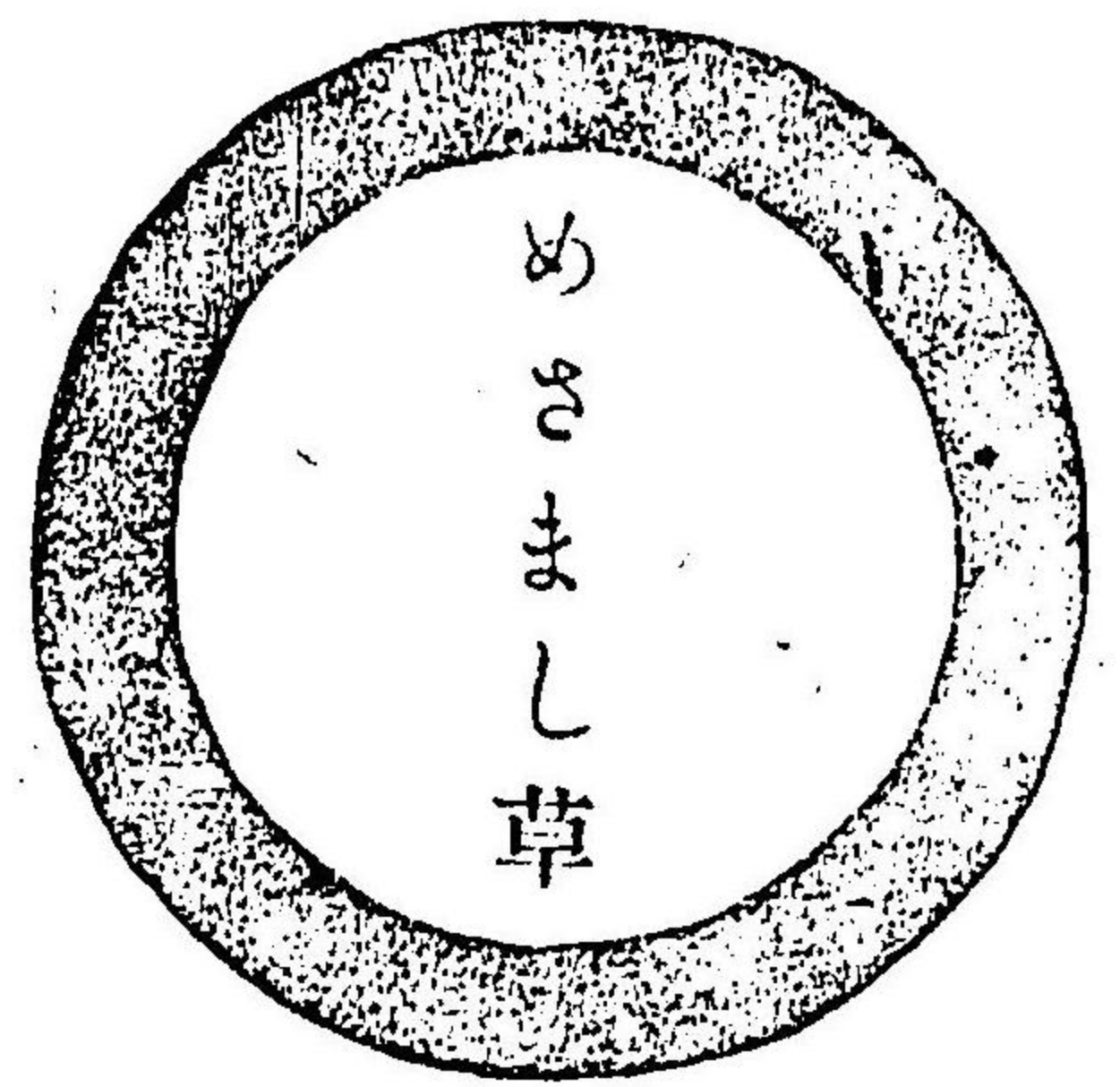






222  
115

大坂  
毎日  
新聞  
社編



菊版半裁頗美製本

定價 金 參拾錢

市外郵稅 金 四 錢

瀛車栗戲愛讀の諸君には

特別減價 金 二十 錢

本書は先頃大阪毎日新聞に連載して博く世上の好者に歡迎されたりさまし草を名もそのまゝ茲に移し植  
たものです、新聞はその日々に諧乘て感みない傾きがあつて折角の名草もほんの一時の眺に過ぎないの  
は惜いからで、要するにその面影を何時までもとせめ好者をしてその樂を永遠に保たしめたい婆心に出  
たものです、依て擔任記者に乞ふて冊子としました、これのみは本園に比して更に本書が脚か誇るに居  
ると思ひます、

發行所

大阪心齋橋北詰八十六番邸

殿 々 堂



